スラブ・ユーラシア研究センターニュース　季刊　2022年 165号

SLAVIC-EURASIAN RESEARCH CENTER NEWS　No. 165 July 2022

新センター長から

北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター長に就任した野町素己と申します。SRCに来て今年で15年目を迎えます。着任以来、歴代の敏腕センター長および経験豊かな年長の同僚の下、素晴らしい事務スタッフに囲まれてのんびり勤務してきた私としましては、この4月にセンター長を拝命するにあたり、これまで優れた環境を提供してくださったSRCの皆さんに改めて感謝すると同時に、センター長として、SRC職員全員がこれまで以上にやりがいを見いだせる職場の維持と発展に努めていく所存です。また、SRCのこれまでの維持と発展は、研究者コミュニティの多大なご支持があってこそです。今後もなお、スラブ・ユーラシア研究に関する共同利用・共同研究拠点として、国内外の研究者の皆様および研究コミュニティへの幅広い貢献を実現し、国内外のスラブ・ユーラシア地域研究およびそれに包含される各研究分野の発展に資するよう、さまざまな工夫をしていきたいと考えております。

東欧革命やソ連崩壊から今日まで約30年近くの月日が経ち、その間にSRCも当該地域の総合的な研究機関としての自らの存在意義に危機感を覚えることもありました。しかし、むしろ時間が経つにつれ、スラブ・ユーラシア地域研究の必要性は高まっているように感じられます。例えば、文学関係では2015年にベラルーシ人作家スベトラーナ・アレクシエビッチが、2019年にポーランド人作家オルガ・トカルチュクがノーベル賞を受賞し、中東欧文学から発信される普遍的な価値を改めて考える機会になりました。また、大変不幸なことではありますが、今年1月にカザフスタン大規模抗議活動、2月にロシアによるウクライナ侵攻といった、世界的に注目を集める事件が連続して起きています。研究機関として、これまで以上にスラブ・ユーラシア地域研究の重要性を認識するとともに、当該地域に関する多角的な分析を行い、有意義な研究成果を発信していかなければなりません。また、スラブ・ユーラシアに隣接する国家・地域として重要な中国や中近東との関係も多元的で、今後ますます国内外の各地域の研究者との連携を深め、共同研究を発展させていく必要があります。無論、得られた知見を限られた専門家の世界にとどめることなく、コロナ禍で学んだオンラインの手法も積極的に活用して公開講座・講演会や各種セミナーを組織することで、これまで以上に幅広い成

果の共有を目標とした社会連携にも積極的に取り組んでまいります。

この度SRCは北海道大学の複数の文系部局とともに文部科学省の教育研究組織改組の一環である「領域を超えた地域研究振興のための拠点形成」のための追加予算を申請し、幸いなことに採択に至りました。これに合わせまして、2022年4月に「生存戦略研究ユニット」が立ち上がりました。これまでSRCが促進してきたスラブ・ユーラシア地域の複数分野の研究から得られる、この混沌とした世界を生き抜くための知見を見出し、より広い学際的文脈で学術的理解を深化させ、研究成果を教育・研究コミュニティに、また実社会に、有益な情報として、わかりやすく還元していきたいと思っております。

次世代研究者育成にもこれまで以上に力を入れていく必要が感じられています。スラブ・ユーラシア研究が包含するさまざまな分野を志す学生の数は、全国的に見ても昨今減少の一途をたどっているようで、こうした危機的状況を踏まえて、いかに次世代研究者を取り込んでいくか、これもこの拠点の重要な役割でしょう。

以上に掲げた課題のいくつかは、SRCの課題であると同時に、複数の研究コミュニティにも何らかの形で共感・共有される内容であるとも考えます。したがいまして、関係者の皆様のご協力を賜りながら、少しでも実現に近づけられるようにと願っております。どうぞご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

研究の最前線

2022年度夏期国際シンポジウム（1）：生存戦略研究キックオフシンポジウム ≪アナーキスト的転回？長い２０世紀における帝国支配と抵抗≫開催

国立大学の新しい中期計画に伴って研究活動を再定義すべく、センターでは4月から「生存戦略研究」というプロジェクトが始動しています（その趣旨は前号を参照）。米欧中心の世界秩序が退潮する中で移行期的な危機が頻発しているとの認識からこのプロジェクトを昨年から構想していたところ、ウクライナ戦争が勃発し、事態の急変にいささか戸惑いながらセンターでは、4月を待たずして様々なセミナーを催してきました。今年の夏期シンポジウムは、この「生存戦略研究」で最初の国際シンポジウムとなります。また、科研費基盤B「暴力による民主主義の20世紀：トランスナショナルヒストリーの試み」の総括としても位置付けています。

ソ連解体後のロシア史研究における「帝国論的転回 imperial turn」は、宗教・身分・民族の異なる多種多様な人間集団が強制を伴いつつも、どのように安定的に統合されてきたのか、また人々の利益追求がこうした仕組みの孕む矛盾をいかに増幅してきたのか、このような問題を中心に展開してきました。そのおかげで、他

シンポジウム終了後の充実の表情

の帝国との比較も織り込みつつロシア帝国とソ連の機能（垂直方向の交渉）は著しく解明されてきましたが、支配への抵抗や帝国秩序の瓦解は、周辺的な課題に留まってきました。しかし、他のヨーロッパの植民地帝国に関する研究では過去10年ほど、各帝国に反抗する人々が、1870年代からグローバル化が急速に進展する中、治安機関の追跡から逃れる過程で、様々な地域出身で同じ境遇の個々人と接触を繰り返し、水平方向のネットワークをつくり、コスモポリタンな主体を獲得していたことに関心が集まっています。今回のシンポジウムでは、こうした近年の史学史上の変化を「アナーキスト的転回」と名付け、ロシア帝国とソ連を世界史の時空間に置くことを試みました。そして、抵抗する小さな人間の水平方向の連帯と垂直方向にそびえ立つ国家権力（帝国と国民国家）が複雑に絡まり合いながら20世紀を形作ってきた側面に着目しました。

今回のシンポジウムでは、海外からを含め、多くの報告者と討論者が札幌に入りましたが、「東京オリンピック方式」で観客は入れず、ハイブリッド方式で行いました。会場に集まった20名ほどの出席者は、2年ぶりの対面会議とあって、大いに議論や会話を楽しみました。かつては、スカイプと会場をつなぐ形式では議論が低調でしたが、この間オンライン会議に慣れたおかげで、報告者も質問者も、会場とZoomとの切れ目をさほど感じずに意見交換できました。オンラインで常時20-25名の参加があり、どのセッションも議論は活況を呈し、終了時間はいずれも10分くらい超過しました（もちろん、音響などテクニカルな中断もありましたが）。

ウクライナ戦争で冷戦後の国際秩序が終わったという議論を最近とみに聞きますが、この戦争はもっと長期的な地殻変動と連関しているのではないか、それは19世紀末から始まる「長い２０世紀」の終焉を告げているのではないか、「新冷戦」ではなく何か新しいものが生まれつつあるのではないか。各集団や個々人は、それぞれの時期にどのような言葉、概念、行動を駆使して大きな支配秩序に抗いながら、生き延びてきたのか。そのようなことを考え、意見を交わしていた折も折、2日目午前のセッションの終わりには、安倍元首相銃撃のニュースが飛び込んで来ました。2022年は、世界が深い混乱に陥っていく転換点として歴史に刻まれるかもしれません。「生存戦略研究」を立ち上げたことについて緊張感と責任感を新たにしました。［長縄・諫早］

An Anarchist Turn? Imperial Rule and Resistance in the Long Twentieth Century

共催：国際的な生存戦略研究プラットフォームの構築
科研費基盤B「暴力による民主主義の２０世紀：トランスナショナルヒストリーの試み」
科研費基盤B「融解する帝国：ロシア帝国末期の境界地域における統治の近代化と社会の流動化」
協賛：地域研究コンソーシアム

July 7

Opening Remarks 9:30-9:45

1. Radicalism in Circulation (9:45-11:45)

Roy Bar Sadeh (Columbia University, USA)
"In Quest of Anti-Colonial Federated India: 'Ubaidullah Sindhi (1872-1944) between South Asian and Eurasian Models of Diversity Management"
Norihiro Naganawa (SRC/ Tokyo University of Foreign Studies, Japan)
"The Volga-Caspian Traffic of Muslim Radicals at the Beginning of the Twentieth Century"
Tatiana Linkhoeva (New York University, USA)
"Buryat-Mongol Ethnopolitics and Socialism During the Russian Civil War"
Discussant: Taku Shinohara (Tokyo University of Foreign Studies, Japan)
Chair: Yoko Aoshima (SRC)

2. Resistance in the Aftermath of Empire's Collapse (13:30-15:30)

Naira Sahakyan (Armenian Genocide Museum-Institute, Armenia)
"The Daghestani Vernacular Press and the Revolutionary Discourse of Daghestani Reformists"
Cevat Dargın (Princeton University, USA)
"The Middle East in Rebellion: Resistance to Nation-States and Colonial Administrations in the Aftermath of Ottoman Collapse (1918-1938)"
Yuki Murata (University of Vienna, Austria)
"Nationalizing Revolution: Reconsidering the Imperial Collapse in Dnipro-Ukraine, 1914-1921"
Discussant: Nobuyoshi Fujinami (Tsuda University, Japan)
Chair: Yoichi Isahaya (SRC)

3. Pax Americana? (15:50-17:50)

Juan Cole (University of Michigan, USA)
"Iraq Wars and the Rise and Fall of the post-Cold War US Hyperpower"
Vladimir Petrovic (Boston University, USA)
"A Long March: Modalities of American Military Involvement in the 1990s"
Hiroki Kusano (Saitama University, Japan)
"The Rise and Fall of American Liberal Empire after the End of the Cold War"
Discussant: Hidemitsu Kuroki (SRC/ Tokyo University of Foreign Studies, Japan)
Chair: Shinichiro Tabata (SRC)

July 8

4. Decolonization and Anti-Imperialism in the Cold War (10:00-12:00)

Lorenz Lüthi (McGill University, Canada)
"Anti-imperialist Movements in the Global South"
Christine Hatzky (University in Hannover, Germany)
"Cuba's Role in Africa's Decolonization Processes: The Example of Cuban-Angolan Cooperation (1975-1991)"
Yukie Sato (Waseda University, Japan)
"Resistance, Violence and the U.S. Human Rights Diplomacy in Cold War East Asia: Comparing the Gwangju Uprising with the Kaohsiung Incident"
Discussant: Jun Fujisawa (Kobe University, Japan)
Chair: David Wolff (SRC)

5. Transnational Islamists (13:30-15:30)
So Yamane (Osaka University, Japan)
"Ayatullah Khomeini's Letter to Maududi after the Revolution: Network of Islamic Revivalism"
Koichiro Tanaka (Keio University, Japan)
"Afghanistan Through the Looking Glass of the Islamic Revolution in Iran: The Shifting Balance of Power and Role of Islamism"
Bernard A. Haykel (Princeton University, USA)
"The Huthi Movement in Yemen and its Eclectic Anti-Imperialist Islamist Ideology"
Discussant: Kota Suechika (Ritsumeikan University, Japan)
Chair: Kentaro Sato (Hokkaido University, Japan)

6. The End of the Long Twentieth Century? A View from East Asia
(Roundtable) (15:50-17:50)
Kimitaka Matsuzato (University of Tokyo, Japan)
"How a Secession Conflict Turned into a Total War? Rethinking the Policy Mainstream after the 1975 Helsinki Final Act"
Tomohiko Uyama (SRC)
"Are 21st Century Imperialism and Authoritarianism Different from Those of the 20th Century? Reflecting on Emotional Geopolitics in Eurasia"
Rumi Aoyama (Waseda University, Japan)
"Perceptions and Misconceptions about China's Growing Role in Central Asia"
Tetsuya Sahara (Meiji University, Japan)
"Paradox of the Anti-Globalism: A Comparison of "Bandit Internationalisms" of New Jihadists and Alt-Rights"
Moderator: Naomi Chi (Hokkaido University, Japan)

2022年度夏期国際シンポジウム（２）
≪ロシアにおけるメロドラマとメロドラマ的想像力：新たなパースペクティヴ≫
開催のお知らせ

センターは、≪ロシアにおけるメロドラマとメロドラマ的想像力：新たなパースペクティヴ≫を今年度の夏の国際シンポジウム第2弾と位置づけて、８月1 日（月）・２日（火）に開催します。

このシンポジウムは、安達大輔准教授が研究代表者を務める科学研究費基盤研究(B)「ロシア・旧ソ連文化におけるメロドラマ的想像力の総合的研究」および同准教授が組織した2021年度スラブ・ユーラシア研究センター公開講座「メロドラマするロシア：アジアとの比較から考える大衆文化の想像力」を基に、2021年8月にオンラインで実施された第10回ICCEES大会にて「メロドラマ的想像力を再考する」と銘打った4パネルに参加した海外研究者との協力によって企画されたものです。組織委員会には安達准教授のほか、*Acta Slavica Iaponica*のAdvisory Boardメンバーを務めていただくなど、センターとも縁の深いイリノイ・ウェズリアン大学名誉教授マリーナ・バーリナさんに加わっていただきました。

大衆文化研究にあたって欠かすことができない重要テーマでありながら、ロシアや英語圏でもそれほど研究が進んでいないロシア・ソ連のメロドラマ文化を新しい角度から理論的・体系的に読み直す試みは世界的に見ても類例のないもので、日本国内およびアメリカ・イギリス・ロシア・イタリアから、期待の若手から超大家まで一流の専門家が幅広く集まりました。シンポジ

ウムでそれぞれの報告に検討を加え、英語論集として刊行することが予定されています。

なお、招へい研究者を中心に関連するラウンドテーブルも企画されました。8月5日（金）にはロシアの児童文学・文化に関するものが大阪大学豊中キャンパスにて、8月8日（月）には19世紀から現代までのロシア文化における戦争表象を扱ったものが東京大学本郷キャンパスでそれぞれ開催されます。プログラムの詳細は以下をご覧ください。多くの皆さまのご参加をお待ちしています。［安達］

Melodrama and Melodramatic Imagination in Russia: New Perspectives

Timetable: 20 min. presentation; 20 min. discussion.
Conference Languages: English and Russian
Venue: Zoom at the Slavic-Eurasian Research Center, Hokkaido University, Japan (No audience on site)
Registration: https://zoom.us/meeting/register/tJcuceCpqzMuG9GzokFHMPxtHhriHlFelYOx

August 1, 2022

9:40 am – 9:45 am – **Opening Remarks:** Director of the SRC, Motoki Nomachi, Hokkaido University, Japan
9:45 am – 10:00 am – *Daisuke Adachi, Marina Balina on conference related organizational issues*
10:00 am – 11:00 am – **Daisuke Adachi,** Hokkaido University, Japan, *Rethinking Peter Brooks' "Melodramatic Imagination" in the Russian Context*

Panel I: coordinator Evgeny Dobrenko

11:30 am – 12:10 pm – **Vadim Shnyder,** UCLA, USA, *Melodrama and the Ethics of Attention in Leo Tolstoy's "Kholstomer"*
Discussant: Kirill Zubkov
1:30 pm – 2:10 pm – **Satoshi Bamba,** Niigata University, Japan, *The Dialogic Imagination and its Melodramatic Excess: Bakhtinian and Vygotskian Approach to Dostoevsky's Novels*
Discussant: Katerina Clark
2:10 pm – 2:50 pm – **Kirill Zubkov,** Hokkaido University, Japan, *"To Protect the Russian Stage from French Melodrama": The Genre of Melodrama and the Social Imaginary of Russian Censor in the 19th Century*
Discussant: Daisuke Adachi

Panel II: coordinator Daisuke Adachi

3:20 pm – 4:00 pm – **Yusuke Toriyama,** The University of Tokyo, Japan, *Karamzinian "Melodramas" in Early 19th Century*
Discussant: Satoshi Bamba
4:00 pm – 4:40 pm – **Sawako Ogawa**, Hokkaido University, Japan, *Melodramatic Bodies in Early Russian Cinema*
Discussant: Anna Toropova
4:40 pm – 5:20 pm – **Margarita Vaysman,** University of St Andrews, UK, *Melodrama and the Russian Realist Imagination on Nikolai Chernyshevskii's Chto delat'?*
Discussant: Vadim Shnyder

August 2, 2022
Panel III: coordinator Yusuke Toriyama
10:00 am – 10:40 am – **Evgeny Dobrenko,** Ca'Foscari University of Venice, Italy, *Socialist Realism: Melodramatic Sublime*
Discussant: Serguei Oushakine
10:40 am – 11:20 am – **Katerina Clark,** Yale University, USA, *Modifications to the Melodramatic Conventions of Socialist Realism during the Post-Stalin Thaws of the 1950s*
Discussant: Marina Balina
11:20 am – 12:00 pm – **Anna Toropova,** University of Oxford, UK, *Trauma, Late Stalinist Cinema and the Melodramatic Mode*
Discussant: Evgeny Dobrenko

Panel IV: coordinator Satoshi Bamba
1:30 pm – 2:10 pm – **Serguei Oushakine,** Princeton University, USA, *Do Not Denounce, When in Love: The Melos of (Soviet)Drama*
Discussant: Alexander Prokhorov
2:10 pm – 2:50 pm – **Marina Balina,** Illinois Wesleyan University, USA, *Melodrama of Coming-Of–Age in Young Adult Fiction of the 1960s–1970s: The Case of Anatoly Aleksin (1924–2017)*
Discussant: Elena Prokhorova

Panel V: coordinator Marina Balina
3:20 pm – 4:00 pm – **Alexander and Elena Prokhorovy,** College of William and Mary, USA, *Staying Alive in Neoliberal Russia: Gender and Agency in "An Ordinary Women"*
Discussant: Larissa Rudova
4:00 pm – 4:40 pm – **Mark Lipovetsky,** Columbia University, USA, *Postmodernist "Moral Occult": Ludmila Petrushevskaya and Linor Gorelik*
Discussant: Alexander Prokhorov
4:40 pm – 5:20 pm – **Larissa Rudova,** Pomona College, USA, *Shaping the Personal as the Political: Ekaterina Gordeeva's Show*
Discussant: Serguei Oushakine

Concluding Remarks: Daisuke Adachi and Marina Balina

Sponsored by:
JSPS Grant-in-Aid for Scientific Research (B) (19H01243): A Comprehensive Study on the Melodramatic Imagination in Russian and Former Soviet Culture (Daisuke Adachi, Principal Investigator)
Platform for Explorations in Survival Strategies (SRC, Hokkaido University)
Comprehensive Research on the Slavic-Eurasian Region (the former Soviet Union and Eastern Europe): Research Team on the Cultures and Languages of the Slavic-Eurasian Region (Daisuke Adachi, Motoki Nomachi, Principal Investigators)

August 5, 2022, Osaka University 16:00 –18:00

Roundtable: Childhood in Russia: Yesterday and Today. New Approaches to Children's Literature and Culture. (This roundtable will be conducted in English)

Welcome Address and Introduction: Satoko Kitai, Osaka University
Moderator: Larissa Rudova, Pomona College, USA
Roundtable participants:
Kirill Zubkov, Hokkaido University
Anna Toropova, Oxford University, UK
Marina Balina, Illinois Wesleyan University, USA
Venue: Hybrid style (In person + Online via Zoom meeting)
On-site participation: Nambu Yoichiro Hall (2nd floor in Graduate School of Science Bldg. J, Toyonaka Campus, Osaka University)
Online participation registration:
https://zoom.us/meeting/register/tJEtc-iuqzwuH9catvtSNCHWYYb6tuhHI8uO

Organizers:
The Graduate School of Humanities, Osaka University
Slavic-Eurasian Research Center (SRC), Hokkaido University
Platform for Explorations in Survival Strategies (SRC, Hokkaido University)
JSPS Grant-in-Aid for Scientific Research (B) (19H01243): A Comprehensive Study on the Melodramatic Imagination in Russian and Former Soviet Culture: (Daisuke Adachi, Principal Investigator)
JSPS Grant-in-Aid for Early-Career Scientists (20K12827): Gender Representation in Soviet Culture of the 1920s and 1930s (Kitai Satoko, Principal Investigator)

August 8, 2022, University of Tokyo 16:00 –18:00

Roundtable: Языки войны в русской культуре XIX – XXI веков: преемственность или конфликт? (This roundtable will be conducted in Russian)

Host: Kumi Tateoka, University of Tokyo
Модератор: Александр Прохоров, College of William and Mary, USA
Участники:
Кирилл Зубков, SRC, Hokkaido University
Евгений Добренко, Università Ca' Foscari di Venezia, Italy
Сергей Ушакин, Princeton University, USA

Venue: Hybrid style (In person + Online via Zoom meeting)
On-site participation: Room No.1, Faculty of Law and Letters, Bld.2, Hongo Campus, University of Tokyo
Online participation registration:
https://zoom.us/meeting/register/tJIqduGqqj0pHd0bc6KbKU-0klZRkIGDRll1

Organizers:
Department of Slavic Languages and Literatures, University of Tokyo
Slavic-Eurasian Research Center (SRC), Hokkaido University
Platform for Explorations in Survival Strategies (SRC, Hokkaido University)
JSPS Grant-in-Aid for Scientific Research (B) (19H01243): A Comprehensive Study on the Melodramatic Imagination in Russian and Former Soviet Culture: (Daisuke Adachi, Principal Investigator)

宇山智彦教授がカザフスタン共和国ドストゥク勲章を受章

センターの宇山智彦教授が、2021年12月2日付のカザフスタン共和国大統領令により、ドストゥク（友好）二等勲章（II дәрежелі «Достық» ордені）を受章しました。勲章の伝達式は、松井啓初代駐カザフスタン日本大使へのカザフスタン共和国独立30周年記念メダル授与式とあわせ、2022年3月18日に、東京の在日カザフスタン大使館で行われました。

サブル・エシムベコフ駐日カザフスタン大使（左）からの勲章授与

ドストゥク勲章は、社会的和合、平和の増進、民族間の友好・協力に関わる功績に対して授与されるもので、二等勲章はこれまでにカザフスタンおよび諸外国の国会議長・大臣クラスの政治家や、学者、宗教者、文化人などが受章しています。サブル・エシムベコフ駐日大使は、今回の授章は、宇山教授がカザフスタンの歴史・文化・社会を幅広く研究し、特にロシア革命期の自治運動アラシュ・オルダの研究を行って、カザフスタンと日本の相互理解を深めたことによるものであると説明しました。宇山教授はカザフ語で答礼スピーチを行い、この受章は自分だけではなく日本のカザフスタン研究者全体の業績に対するものであると理解していると述べ、お世話になったカザフスタンの学者・知識人への感謝の意を表すとともに、アラシュ・オルダと日本の関係についての新発見の史料に触れ、カザフスタンのさらなる発展を願う気持ちを語りました。［編集部］

ドストゥク勲章

人間文化研究機構地域研究推進事業「北東アジア」の終了

センターは、人間文化研究機構地域研究推進事業「北東アジア」に関わる拠点として、同事業に貢献してきましたが、2022年3月をもって無事、終了しました。拠点は『北東アジアの地政治：米中日ロのパワーゲームを超えて』（北海道大学出版会）など様々な成果を刊行しました。これまで多大な協力と支援をくださった方々に心よりお礼申し上げます。詳細は拠点ホームページをご覧ください。［岩下］

https://hokudaislav-northeast.net

境界地域研究ネットワークJAPAN（JIBSN）の年次セミナー開催

2022年2月26日（土）に、JIBSN実社会共創セミナー「JIBSN10周年・ネットワークリレー　境界地域をつなぐ」がウェビナーで開催されました。コロナ禍での2021年のセミナーでは、根室、稚内から対馬、与那国まで加盟する9つの自治体の首長がオンラインで勢ぞろいしましたが、今回は日本の境界地域をつなぐ実況リレーのかたちで行われました。雪のなか寒い北海道と温暖な沖縄、小笠原などからの最新レポートは日本

の「多様性」を映像を通して伝えました。なお、北海道大学総合博物館でもJIBSN設立10周年を記念する展示コーナーが設けられています。今年度のセミナーは11月に対面も含めて、沖縄・八重山での開催を予定しています。2月のセミナーの模様は下記から視聴できます。［岩下］

https://www.youtube.com/watch?v=j65VAbHSaMY

2022年度公開講座
「溶解する帝国－ロシア帝国崩壊を境界地域から考える」開講される

昨年度の公開講座は感染予防のため全面オンラインでしたが、本年度は初のハイブリッド形式での開催でした。感染対策のために会場での参加は15名限定としましたが、オンラインでの参加は毎回100 ～ 140名程度（海外10か国からも含む）で、延べ922名の方にご参加いただきました。

公開講座のテーマは、300年君臨したロシア帝国の崩壊を、帝国の近代化の試みと様々な境界地域における諸民族の動向から考える、というものです。このテーマのもと、7名の講師たちは、それぞれ西部境界地域、極東の朝鮮人、ヴォルガ・ウラルのタタール人、北コーカサスの山岳民族、中央アジアのカザフ人とクルグズ（キルギス）人、南西部のユダヤ人、ウクライナ人などの限定された地域・民族に焦点を当てながら、広大な北ユーラシアを統治したロシア帝国の多様な統治の実践、諸民族のそれへの協力や反発、独自のネットワークや生活様式などについて解説し、さらにそれが帝国末期の近代化の進展、革命的情勢や戦争のなかで、どう変化し、どう統治が「融解」していったのか、多様な観点から論じました。現在、ロシアによるウクライナ侵攻によって、冷戦終結後の国際秩序が「融解」し始めているように見えます。この事態の推移を展望するためには、多様な諸地域・諸民族・諸文化を束ねる大きな政治体としての「帝国」（あるいは「列強」）が地球上の大部分を支配した19世紀から20世紀の近現代史を改めて振り返る必要があるでしょう。そのなかでどのように「民族」意識が高まり、それが政治的な諸権利の要求と結びつきながら、国際的な秩序のあり方を変容させていったのか。ロシア帝国とソ連は北ユーラシアの巨大な領域を独特の秩序で支配していました。近現代におけるこの地域の秩序の変容を、国家のロジックのみならず、多様な諸民族の経験から再検討する試みには、今日の国際秩序の「融解」を理解するための重要な鍵が隠されているように思います。

今回の公開講座は昨年末に企画されたものでしたが、企画当初の予想を超える重いアクチュアリティを背負うことになりました。

聴講してくださった方の多くも「この地域の深層に流れているものが知りたい」「タイムリーな内容だったので興味が湧いた」などを参加理由としてあげており、実際、講義末の質疑応答の時間には、毎回様々な質問が数多く出されました。多彩な事例を紹介しつつ、それを大きな歴史の流れと結びつけて解説する講師陣の講演もそれぞれ非常に好評で、企画全体としても良い評価を頂けたと感じています。センターに来場した方々からはコロナ後の迅速な対面講義の実施に対してお褒めの言葉をかけていただくとともに、オンライン参加の方々からは遠方からも参加できる今回の形式を続けて欲しいとのご意見も数多く頂きました。全般にハイブリッド形式は「新鮮でよかった」とのことで、ポスト・コロナ時代の公開講座の一つのモデルともなるでしょう。［青島］

民族化が進むロシア帝国について説明する青島准教授

第１回	5/9（月）（ハイブリッド）	ロシア帝国の近代的諸改革と西部境界地域	北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 准教授 青島　陽子
第２回	5/13（金）（ハイブリッド）	ロシア極東のアジア系住民：朝鮮人を中心に（19 世紀後半～ 20 世紀前半）	早稲田大学大学院政治経済学術院　准教授 シュラトフ　ヤロスラブ
第３回	5/16（月）（ハイブリッド）	イスラーム教徒と帝国の戦争	北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 教授 長縄　宣博
第４回	5/20（金）（ハイブリッド）	コーカサス・ムスリムのディアスポラと二つの帝国の解体	ビルケント大学経済学・社会科学学部　博士課程 野坂　潤子
第５回	5/23（月）（ハイブリッド）	まつろわぬ協力者：「巡礼」で読み解く中央アジア遊牧社会	北海道教育大学教育学部釧路校　准教授 秋山　徹
第６回	5/27（金）（ハイブリッド）	帝国が溶解すると何が起こるのか：ユダヤ人の場合	東京大学大学院総合文化研究科　准教授 鶴見　太郎
第７回	5/30（月）（オンライン）	ウクライナとロシア：南西諸県におけるナショナリズムの競合	ウィーン大学歴史文化学部 博士課程 村田　優樹

国際ワークショップ「比較帝国史：ユーラシアとアメリカからの視点」開催される

センターは6月6日に、“Comparative Imperial History: Eurasian and American Perspectives”と題する国際ワークショップをハイブリッド形式で開催しました。秋田茂・大阪大学教授の招きにより、イギリス帝国史・アメリカ帝国史研究で著名なアントニー・ホプキンズ教授が来日したのを機に、センターに滞在中だったマイケル・ホダルコフスキー教授と、2人の気鋭の日本人研究者（井上岳彦氏、秋山徹氏）を合わせ、アメリカ帝国史とロシア帝国史の対話を図ることを

ホプキンズ教授（左端）の発言に耳を傾ける参加者たち

目的としたワークショップでした。センターの「生存戦略研究」の活動としても位置づけられています。報告タイトルは「研究会活動」欄をご参照ください。

ホプキンズ教授は、イギリスに従属していたアメリカが実質的に独立するには19世紀末までの長い時間がかかったこと、19世紀末から20世紀半ばまでのアメリカの海外領土獲得は、目的も統治方法も英仏とほぼ同じであったこと、全体的にアメリカは西欧諸帝国との差異はあっても例外的ではなかったことについて、刺激的な講演をされました。ロシア帝国史に関する3人の報告は、ロシア帝国の拡大・統治における植民政策、宗教政策の特徴や地理的ファクターについて重要な知見を提供するものでした。2人の討論者からは、グローバル化の3つの段階、インフォーマル帝国論、コラボレーター論、ローカル／ナショナル／リージョナル／グローバルの4層の歴史、商業・貿易と帝国主義の関係、ロシア・英・米と山岳の関係の比較など、大きな観点からのコメントが出されました。フロアを交えての議論も、アメリカとロシアの拡大・統治の比較、環境史の観点からの比較など、多様な論点で盛り上がりました。パネリストの懇親会では、ホプキンズ教授から、米英の現状についての見方や、有名なイギリス帝国史研究者たちの人柄について、貴重なお話を伺うことができました。［宇山］

第64回北大祭・施設公開「危機を知る、ウクライナを知る」開催される

2022年6月4日（土）、3年ぶりとなった北大祭の実地開催にともない、スラブ・ユーラシア研究センターも施設公開イヴェント「危機を知る、ウクライナを知る」を開催した。企画は、施設の4階ラウンジを解放しての「ミニ図書館」と、4階大会議室とオンラインとをつなぐ形で行った「サイエンス・トーク」の2つであった。「ミニ図書館」では、センターの所員や共同研究員がこれまでに書いた書籍や雑誌・新聞記事などを集めた展示がなされた。

ミニ図書館の様子

「サイエンス・トーク」は2本の講演で構成されており、ウクライナ語について野町素己研究員が、ウクライナ戦争に関わるロシア経済について田畑伸一郎研究員がそれぞれ解説を行った。具体的なプログラムは下記の通りである。

①14：00 ～ 14：30 野町素己「ウクライナ語ってどんな言葉？」
［司会：清沢紫織］
②15：00 ～ 15：30 田畑伸一郎「ウクライナ侵攻でロシア経済はどう変わった？」
［司会：後藤正憲］

当日の来場者はのべ70名を数え、ハイブリッドで行った「サイエンス・トーク」は双方とも対面/オンラインの合計で50名弱の参加者を集めた。

配信映像を流し、ラウンジでの聴講も可能にした

過去2年の北大祭は、それぞれ中止とオンラインでの開催ということで、施設公開はこの2年間実施しておらず、春先には「今年もないだろう」という空気が所内に漂っていたことは否定できない。ところが、年度が変わってからのタイミングで北大祭の対面形式での開催を知らされるところとなった。ただ、例年であればとうに準備を始めていなければならないタイミングであり、この時点でも施設公開の実施は難しいとの空気は濃厚であった。

しかし、2月に始まったロシアのウクライナ侵攻は依然として予断を許さない状況であり、「国内唯一の総合的なスラブ・ユーラシア地域研究機関」である当スラブ・ユーラシア研究センターの所員・共同研究員が色々な媒体でこれに関して発言し、物を書いている現状があった。北大祭の施設公開は、一般の方々にセンターの取り組みを知ってもらうということを主目的としており、このウクライナ危機をテーマに、むしろ施設公開を今だからこそすべきではないかという声が所内から起こったのである。その結果として、施設公開企画「危機を知る、ウクライナを知る」の実施が決まった。

その後はすみやかに準備のフェーズに移行し、本や雑誌の選択・発注や新聞記事の切り抜きパネルの作成などが、運営チームを中心に急ピッチで進められた。準備にせよ講演にせよ、担当者の献身的な協力なしにはこの企画は実現しなかった。特にデザイン・制作を一手に担った研究支援推進員のささやめぐみさんには、ここに名前をあげることで特別の敬意を表したい。

田畑研究員講演後の質疑のようす

多くの方々にアンケートにも御記入いただき、「まず、ありのままの現実を知ることが必要だと思いました」と来場の理由を書いて下さった方もいた。「ありのままの現実」とは、あるいは見出しえぬ青い鳥なのかもしれない。しかし、このセンターがそうした思いに少しでも応えることができたのであれば、鳥かごほどの役割は果たせたであろうか。［諫早］

書評会「中塚武『気候適応の日本史』を読む」報告記

2022年6月13日（月）、Zoomウェビナーによるオンラインで書評会「中塚武『気候適応の日本史』を読む」が開催された。本書評会は文字通り、古気候学者の中塚武氏（名古屋大学）の近著『気候適応の日本史：人新世をのりこえる視点』（吉川弘文館、2022年）の書評を行うものである。プログラムはポスターの通りであった。

この『気候適応の日本史』は、弥生時代以来の日本の歴史の全体を気候変動に対する人間社会の適応という新たな視点からとらえ直そうとするものである。そしてこの書評会は、中塚氏もメンバーである科研プロジェクト「14世紀の危機」についての文理協働研究」（代表者：諫早庸一）をベースにしており、特に13 ～ 14世紀の歴史からこの本を読むことが今

回の書評会の目的の1つであった。そこで、日本中世史、特に10 ～ 14世紀（平安後期～鎌倉期）を専門とする佐藤雄基氏（立教大学）にコメンテータとして御登壇いただくこととなった。佐藤氏の研究テーマは中世史料論・法社会史・史学史が主であり、言ってみれば「正統派」の中世史家にこの本を評してもらいたい、そうした思いからの依頼であった。もう1人のコメンテータは、この科研プロジェクトのメンバーでもある西村陽子氏（東洋大学）であった。中塚氏の議論の根幹となる中部日本のデータは本州のみならず、北半球全体や東アジアの気温および降水量の長期変動とも相関関係があり、これを基に中塚氏は自らの議論を東アジア史にも開いている。これに応答すべく東アジア史、特に中国隋唐五代（7世紀から10世紀ごろ）におけるユーラシア東部地域の研究をしている西村氏に御登壇いただいた。

以上のことを「趣旨説明：歴史学と古気候学をつなぐ」で述べた諫早は最後に、今回の書評会の要点の１つが「歴史学と古気候学をつなぐ」ことであり、その鍵の1つが両者の時間スケールのすり合わせにあるとした。書評本では、歴史の事象が変動の時間スケールごと、長周期・中周期・短周期の分類でもって表現される。こうした「サイクル」でもってものを考えることに歴史学は必ずしも慣れていない。この種の時間スケールをどのように歴史学研究に組み込んでいくのか、これが論点の1つであった。

続いて著者の中塚氏が登壇した。中塚氏は「なぜ気候適応の「通史」をめざすのか？」と題した報告のなかで、書評本のさわりを述べた。中塚氏は本の目次に沿って概要を述べたのち、年輪セルロースの酸素と水素の同位体比を組み合わせることによって過去2600年間の中部日本の夏の気候変動をあらゆる時間スケールで復元することに成功した、世界初の達成に言及した。書評本はこの成果が基になっている。このデータを解析することで、1）気候には千年あまりの大きな周期性があること、2）先史から中世にかけては約400年に一度、中世から現在までは一貫して、数十年周期の気候変動の振幅が拡大してきたこと、以上の2点が明らかになった。そして、この「数十年周期」の変動、その振幅拡大の時期が、ことごとく中華王朝交替のタイミングや日本の政治体制の変化と合っているというのが中塚氏の主張である。ではそれはなぜなのか。この問いを中塚氏は古気候データと米の収穫量のデータの推移を重ね合わせることで解いていく。つまり、気候の良悪そのものが歴史を動かすのではなく、数十年周期で気候が良くなったり悪くなったりすることが、人口と生産力のバランスを崩し、戦乱を招くというのが彼の仮説である。江戸時代の飢饉および百姓一揆と年輪酸素同位体比の関係においても99パーセント以上の有意な相関が見られている。つまり、数十年周期での気候の悪化が、江戸時代においても飢饉や百姓一揆につながったと思われるのである。こうした仮説を基に、気候の変化――特に数十年周期変動――に人間社会がどう対応してきたのかを問うこの本はさらに、時代や地域を超えた無数の事例を取った比較史へと道を開くものなのであった。

これに佐藤氏のコメント「「中周期」の気候変動と中世日本：記憶と統治」が続く。佐藤

氏は、日本中世史研究の立場から3つの観点に基づいてコメントを行った。まずは、古代から中世への移行という観点である。この移行は律令体制が崩れ、国家が「小さな政府」と化していくプロセスであった。こうした移行に10世紀の災害という要素を考慮するのは魅力的だと佐藤氏は述べる。一方で佐藤氏は、当時の国際要因も考える必要があると指摘する。日本における古代から中世への移行は、唐王朝の衰退による日本を取り囲む国際的緊張の緩和と軌を一にしている。しかし、10世紀に唐や新羅が相次いで倒れたのに対し、日本に王朝交替はなかった。この「中国・半島との分岐」を気候変動の面から考えることはできるのかと、まさに中塚氏が書評本で可能性を模索した「「同じ原因」が「異なる結果」をもたらした「決定的な要因」を探る比較史研究」のトピックの提示であった。また、9世紀以降の日本列島が中国・半島と正式な外交を結ばなくてもやっていけた（対外的孤立の）背景として、9世紀以降の海域アジアの交易ネットワークの成立は決定的な重みをもつが、海域世界と気候変動はどういう関係があるのかと問いかけた。次に「飢饉のない14世紀」論についてである。中塚氏が拠った伊藤啓介氏の議論では、1280年代以降、14世紀には急な寒冷化があっても飢饉を示す史料が増えないという事実を俎上に載せる。貨幣経済の浸透による米の商品化とそれに伴う市場経済の価格調整メカニズムとが飢饉を抑制したとの議論である。例えば、1330年の飢饉に関しては、後醍醐天皇の政策として公定価格による米の販売を強制したために飢饉が抑制されたことが史料に記される。しかし、佐藤氏はこの政策が功を奏したのは実のところ京都をはじめとする経済的に豊かな地域だけであった可能性を指摘する。中世の史料の残り方には偏差が大きく、地方の状況というのは必ずしもよく分からないのである。そして、最後の論点として佐藤氏が提示するのが飢饉の記憶である。第2の論点においては、「飢饉のない14世紀」に比して、13世紀前半の飢饉の多さが語られていた。そのなかの1つである寛喜の大飢饉（1230年～）の記憶は、それに対処した北条泰時の諸政策とともにある。佐藤氏は、かりに13世紀後半以降に大飢饉が少なくなるとすれば、それ以前の大飢饉の経験が影響を与えた可能性があるのではないかと問う。飢饉のそのものとともに、飢饉に対応した（たとえば飢饉における身売り慣行など）社会慣行もまた受け継がれていくのである。

次のコメントは西村氏による「気候変動と中国史の展開」である。西村氏は、自らの議論を中国史にも適用可能だとする中塚氏の主張をポジティブに捉える。中塚氏が論じるように、16 ～ 64年周期で気候の振幅が大きい時期は、確かに中国においても戦乱の時期に当てはまっている。従来、政治の乱れに帰せられてきた危機に環境要因も併せて考える必要があるのである。こうした事例を西村氏は時代ごとに具体的に見ていく。まずは秦漢期について、王朝の交替期には振幅幅が大きく、逆に変動幅の小さい時期が漢前半の50年と武帝による対外勢力伸長の時期と重なっている。次に後漢から三国時代にかけて2世紀のはじめ頃から大きな振幅がある。この時期、後漢末期には5978万人と記録されていた戸口数は、三国時代には1400万人へと激減している。飢饉の規模を示す指標として戸口数も有用なのではないかという提起であった。次に西村氏が専門とする隋唐期である。隋から唐初の時代にかけて、つまり6世紀半ばから7世紀半ばの時代においては、2世紀や14世紀に匹敵する大きな振幅が見られる。この時代は盛世にあった隋が急転滅亡していく時期と重なっている。従来その滅亡は高句麗遠征の失敗など帰せられているものの、同様の政策は唐初にも見られている。609年には5139万人あまりであった人口は、640年には1449万人にまで激減しており、王朝による戸口数把握の困難さだけではなく、大規模な飢饉を考える余地があるのである。時代が下って唐末・五代期にも800年以降に大きな振幅が見られる

が、この時代には華北で遊牧勢力が活動を活発化させ、各地で武力衝突が起こる。それがこの時期に顕在化する所以は従来必ずしも明らかにされてこなかったが、西村氏は中塚氏の数十年周期仮説が新たな視座を与える可能性に言及した。その一方で西村氏は、振幅が大きく飢饉の記録が続くにもかかわらず戸口数が持ち直す9世紀前半や、日本に飢饉が頻発しつつ、中国清王朝では人口が急激に伸びる17・18世紀など、必ずしも気候変動だけでは説明できないケースも挙げ、より解像度を上げたデータと今後の資料拡充が必要であることを指摘した。西村氏は最後に、気候変動の様々な周期こそが、歴代王朝に襲いかかった「天命」の正体であったのかもしれないとし、さらに気候データを、文字資料を検証するためのもうひとつの記録史料と位置付ける見方を提示してコメントを閉じた。

その後に総合討論の時間となった。議論は多岐にわたり、活発に意見が交わされたが、中心的な論点の1つはやはり、佐藤氏が後醍醐天皇の施政の文脈で述べた地域偏差の問題であった。これは佐藤氏のもう1つの論点であった10世紀初めにおける中国・半島と日本の「分岐」や、西村氏から指摘のあった17・18世紀の日中の人口動態の逆相関ともつながる。さらに、日本のなかでも地域の気候特性の違いを問う質問があった。これについて中塚氏は、西村氏の最後の指摘ともあわせて中国と日本では年輪酸素同位体比がみている気象現象が少々異なること、その理解を進めることで地域ごとの古気候復元の精度をさらに上げていける可能性があることに言及した。一方で地域偏差はより歴史学の方で、それこそ中塚本の議論を踏まえつつ考えていくべきものでもあるのだろう。気候の地域差という論点が出たが、14世紀というモンゴル帝国の時代を扱う我々のプロジェクトにとっては、社会における生業の違いも見逃せない。この点について中塚氏は農業社会に根差す自らのモデルを、例えば遊牧社会について考えるべきことも述べた。この議論に関連して、気候の地域偏差とともに、やはり社会ごとの適応差を考えることができるのであろう。例えば中国史を構成してきた北の遊牧社会と南の定住社会との関係性については、それぞれの社会のサイクルを考えることで新たな視座を開くことができるかもしれない。例えばモンゴル時代にイランに至ったモンゴルは、その地のイラン定住民とは異なるサイクルで生きた。個々のサイクルは時に摩擦を生み、時に重なり合いながらその地域の歴史を形成していく。そのサイクルの抽出に、気候・環境因子を欠かすことはできないのである。

最後に多くの論点を提示し、議論を深めて下さった登壇者の方々や質問者の方々、参加者の方々全てに御礼申し上げる次第である。［諫早］

2022年JCREESスラブ・ユーラシア研究サマースクール開催予告

2021年は、ロシア・東欧学会の主催、センターの共催でスラブ・ユーラシア研究サマースクールが初めて開かれましたが、今年はJCREESの主催、センターの共催で8月25日～26日に開かれることになりました。これは、スラブ・ユーラシア地域の研究を志す学生を増やし、学生による同地域の学際的な研究を支援・奨励することを目的とするものです。2日間にわたって6つの講義がなされるほか、参加学生の発表が行われます。JCREESからの資金提供とセンターの百瀬宏研究奨励基金からの支援により、全国の大学の学部3～4年生、大学院修士・博士課程の院生が参加します。公募は7月3日を締切として行われました。7月中旬には選考結果が発表される予定となっています。このサマースクールの詳細については、サイトをご覧ください。［田畑］http://slav.starfree.jp/summer2022/

共同研究員

2022年度からセンター共同研究員になっていただく方々は以下の通りです（各カテゴリーの中では五十音順）。2021年度から2年任期の共同研究員については、センターニュース第162号をご参照ください。［編集部］

共同研究員（一般）

任期：2022年4月1日～ 2024年3月31日（2年間）

天野尚樹（山形大）、荒井幸康、伊藤愉（明治大）、井上岳彦、ヴァレリー・グレチュコ（東京大）、越野剛（慶應義塾大）、小泉悠（東京大）、斎藤慶子（大阪公立大）、シュラトフ・ヤロスラブ（早稲田大）、東島雅昌（東北大）、藤森信吉、堀江典生（富山大）、前田しほ（島根大）、松井康浩（九州大）、宮崎千穂（静岡文化芸術大）

任期：2022年4月1日～ 2023年3月31日（1年間）

大武由紀子、金沢友緒（電気通信大）、古宮路子（東京大）、志田仁完（西南学院大）、中原裕美子（九州産業大）、西山美久（北大国際連携機構）、日臺健雄（和光大）、松澤祐介（西武文理大）、山田哲也（南山大）、山田良介（九州国際大）、山脇大（日本銀行）、吉村貴之（早稲田大）

生存戦略共同研究員

任期：2022年4月1日～ 2024年3月31日（2年間）

秋草俊一郎（日本大）、泉川泰博（青山学院大）、遠藤乾（東京大）、大石侑香（神戸大）、岡本亮輔（北大メディア・コミュニケーション研究院）、北野圭介（立命館大）、後藤春美（東京大）、小松久恵（追手門学院大）、酒井啓子（千葉大）、佐々木卓也（立教大）、佐藤健太郎（北大文学研究院）、末近浩太（立命館大）、菅井健太（北大文学研究院）、寺尾智史（一橋大）、土井翔平（北大法学研究院）、當山奈那（琉球大）、中澤達哉（早稲田大）、馬場香織（北大法学研究院）、原田大輔（石油天然ガス・金属鉱物資源機構）、藤波伸嘉（津田塾大）、宮脇昇（立命館大）

境界研究共同研究員

任期：2022年4月1日～ 2024年3月31日（2年間）

池ノ上真一（北海商科大）、井竿富雄（山口県立大）、上原良子（フェリス女学院大）、エドワード・ボイル（国際日本文化研究センター）、川久保文紀（中央学院大）、黒岩幸子（岩手大）、鈴木一人（東京大）、田中輝美（島根県立大）、田村慶子（北九州市立大）、花松泰倫（九州国際大）、平井一臣（鹿児島大）、福原裕二（島根県立大）、古川浩司（中京大）、水谷裕佳（上智大）、三村光弘（環日本海経済研究所）、山上博信（NPO国境地域研究センター）、山崎孝史（大阪公立大）、屋良朝博

専任研究員・助教・非常勤研究員セミナー

ニュース前号以降、専任研究員セミナー等が以下のように開催されました。

専任研究員セミナー

3月7日：野町素己

報告：The Evolution of Samuil B. Bernštejn's Views on Two "Questions of Slavistics"

コメンテータ：E. Wayles Browne（コーネル大学）

今回のペーパーは、カシュブ語とマケドニア語をめぐる、方言か独立した言語かという論争を歴史的に概観しつつ、そこでロシア・ソ連の公式見解が議論の当事者たちに対して持っていた影響力という観点から、ソ連および東欧諸国のスラブ言語学において主導的な役割を担っていたサムイル・ベルンシュテインの見解の変遷とその理由を論じるものでした。野町研究員は、ベルンシュテインが執筆したカシュブ語とマケドニア語に関する全ての刊行資料に加え、モスクワの文書館に保管されている彼が50年以上にわたって書き続けた未刊行回想録、モスクワとスコピエに保存される未刊行論文や書簡、個人所蔵の資料などを分析したほか、直接の弟子たちへの聞き取り調査も行い、カシュブ語とマケドニア語に対するベルンシュテインの見解の変遷を丁寧にたどりました。結論として、前者については「言語から方言へ」、後者は「方言から言語へ」という方向にまとめられましたが、未刊行資料ではベルンシュテインの見解が真逆になっていたことも明らかにされ、ベルンシュテインの見解の変遷はソ連の公式見解に盲目的に従っていたのではなく、その変遷はむしろスラブ語学の発展や社会言語学的な状況に基づく学術的なものであったことが明らかにされました。

コメンテータのブラウン教授は、野町研究員が文書館資料を利用してスラブ言語学史の空白を埋める作業に取り組んだことを評価するとともに、標準語化をめぐるマケドニアの言語学者とベルンシュテインの関係や、カシュブ語の特徴について現代語の観点から補足を行いました。

出席者からは、未刊行資料と刊行資料に表れた見解の差異やその扱い方、ベルンシュテインのマール主義への態度、1940年代にマケドニア語を支援したブルガリアの共産主義者が50年代には正反対の態度をとるに至った背景、当時の言語学と政治状況や国際関係を幅広く問う質問が出されました。マケドニア語の標準化に関して現地と協力するはずが最終的に排除されたという事情があったにもかかわらず、ベルンシュテインがマケドニア語の「あるべき姿」について継続して執筆した理由、ベルンシュテインをマケドニア語研究に誘った師のアファナシイ・セリシチェフとの関係といった、学際的な観点からスラブ言語学の知識が共有される有益な場となりました。［安達］

3月9日：青島陽子

報告：帝政ロシア史研究における「帝国論的転回」：ロシア帝国西部境界地域を中心に

コメンテータ：篠原琢（東京外国語大学）

2000年代にブームとなり、現在も新しい研究が出続けているロシア帝国論について、*Kritika*、*Ab Imperio*両誌を中心に研究動向を整理・検討したペーパーです。「2000年以降、ロシア帝国は権力と諸民族の間の明確な支配・被支配関係としてではなく、多様な住民に対して権力が様々な形で作用する空間であると見なされるように」なり、「「無定形」な社会と、その社会に対して状況に応じて様々な形で作用する権力との間の相互作用のダイナミズム」が強調されるようになったという認識のもと、多様な論点に関する研究や論争を紹介しています。コメンテータからは、ペーパーで使われているいくつかの概念の理論的・歴史的文脈の解説と、帝国諸領域の関係という論点をハプスブルク帝国に適用した場合に言えることの説明がなされました。参加者からは、紹介されている諸研究の政治性や、報告者自身の立場と今後の研究の方向性、またロシア以外の帝国に開かれた議論になっているのかについての質問が出されましたが、それに対する報告

者の応答は、とるべき立場についての苦悩を表していました。ロシアのウクライナ侵略という状況を背景に、ロシアを同時代の世界におけるアノマリーとは考えない、権力と諸民族の関係を明確な支配・被支配とは見なさないという、ロシア帝国論にしばしば目立つ研究姿勢は再検討を迫られているところですが、本ペーパーで紹介されている、ロシア帝国における法とシティズンシップの存在を強調する議論への批判や、帝政末期に「民族の牢獄」というイメージが一般に広まるほど諸民族のネイション化が進んだのはなぜなのかという問題提起には、そうした問題を考察する材料が含まれているように見えます。このセミナーでの議論は、ロシア帝国論を、苦悩しつつ、新しい形で再生させるための一歩となったと思われます。［宇山］

3月22日：ウルフ、ディビッド

報告：The Fate of the China Russians: Exclusion, Agency, Divided Redemption

コメンテータ：高尾千津子

このペーパーは、第二次世界大戦後の内戦・共産化によって中国からの移住を余儀なくされた白系ロシア人たちの複雑な運命をテーマとしたものです。彼ら・彼女らの多くは最終的にアメリカとオーストラリアに移住しますが、移住を受け入れてもらうためには、ソ連とのつながりがないことを証明する必要がありました。また、アメリカのロシア正教会の協力を得るために正教徒としての性格を強調することが有利であり、白豪主義のオーストラリアに行くためには多民族性は不利であったため、イスラエルに移住すればよいと考えられていたユダヤ人たちは、白系ロシア人の移住運動からは排除されました。移住が実現する前に国連難民機関の支援により滞在したフィリピンのトゥババオ島の難民キャンプでは、ハルビン工業大学の卒業生と、英語能力の高いボーイスカウトたちが重要な役割を果たしたという、興味深い指摘もありました。コメンテータからは、難民化前のハルビン工業大学卒業生と上海ロシア人社会の関係や、中国・満洲におけるロシア人とユダヤ人の関係、日本軍の反ユダヤ主義の影響について質問がありました。参加者からは、他の難民問題との比較、フィリピンへの受け入れにおけるアメリカの影響、スカウトの活動などについて質問があり、報告者の応答からも興味深い情報が得られました。［宇山］

4月8日：安達大輔

報告：The problem of attention in the opera and film adaptations of *The Queen of Spades*

コメンテータ：Rachel Morley (UCL School of Slavonic and East European Studies)

プーシキン原作の『スペードの女王』に基づくチャイコフスキーのオペラ、チャルドゥイニンの映画、プロタザノフの映画について、何が観客の注意を集め、何が注意を散らすのかに関する同時代の批評を分析したペーパーです。特にオペラにおけるヴィジュアルと音楽の関係、映画におけるクロースアップの効果、プロタザノフの映画でゲルマンを演じたモジューヒンの眼に注目しています。コメンテータは、このペーパーが従来の研究と異なり、物語理解の進展としてではなく、娯楽的没入体験として初期映画の発展を跡付けようとしていること、初期映画のスペクタクル性をジェンダーに限定されずに考察する可能性を示していることを評価し、映画史研究の文脈でさらに検討すべき点を詳細に述べました。参加者からは、注意という問題を論じることの意味、人の注意を長く引きつけることの難しさ、帝政末期に現れたスロー・テンポと静止画を特徴とする「ロシアン・スタイル」の映画などについて、さまざまな質問が出ました。［宇山］

4月21日：岩下明裕

報告：Geo-Politics in Northeast Asia

コメンテータ：佐々木卓也（立教大学）

報告者がYong-Chool Ha、Edward Boyle両氏との共編でラウトレッジから刊行する予定の本から、Boyle氏と共著の序論“Geo-Politics in Northeast Asia”、Ha氏と共著の第1章“Debunking the Myth of Northeast Asia”、Boyle氏と共著の結論“Reflecting on Regional Community in Northeast Asia”がセミナーに提出されました。北東アジアで地域統合や多様な協力関係がダイナミックに進むという、1990年代に広く見られた期待がその後幻滅に変わっていったという現実を踏まえつつ、「壁」であるだけでなく「ゲートウェイ」でもある国境の性質を活かして、リージョン、国家、サブリージョンという3つのレベルでグローカルなコミュニティを作っていこうという趣旨が全体に込められています。また、報告者が近年提唱している、「地政学」に代わる「地政治」（英語ではハイフンの入ったgeo-politics）、つまり地理と権力に関わる実践と表象や、空間の多層性・可変性に着目して国際政治をフレキシブルに理解する枠組みを、北東アジアに適用する試みでもあります。

コメンテータからは、分析のアプローチと枠組みは十分理解できるが、リージョン、国家、サブリージョンの間、および内部環境と外部環境の相互作用とその影響を、さらに総合的に議論する必要があるとの指摘がありました。また、安倍外交の評価、アメリカの役割、ロシアのウクライナ侵攻の影響について質問が出されました。他の参加者からは、地域を見れば見るほどパワーポリティクスと国家の影が浮かび上がってくるのではないか、そもそも地域統合の枠組みは必要なのかといった、多様な意見が出ました。［宇山］

助教セミナー

3月15日：井上岳彦

報告：ドン・カルムィク仏教教団の台頭

コメンテータ：秋山徹（早稲田大学）

このペーパーは、報告者が博士論文をもとに執筆中の著書の一部を改稿したものです。歴史的にもカルムィキアの現代政治においても重要な役割を果たしていながら、第二次世界大戦期のドイツへの協力などのために、カルムィク史の中で語られることの少ないドン・カルムィク人に注目しています。ドン・カルムィク人のコサック化の経緯と、旧王公の不在という特徴を解説したうえで、1839年の教区学校開校式の様子から、ドン・カルムィク人仏教徒とロシア正教会およびロシア皇帝との関係性を浮かび上がらせ、さらには仏教寺院制度の変遷や改革の議論の中から、住民との仲介者としての役割を期待された僧侶とコサック軍当局との関係を読み取り、結論部では、清帝国における皇帝と仏教の関係との比較も試みています。コメンテータと参加者は、各論点の重要性と、チベット仏教世界のトランスナショナル・ヒストリーにつながる可能性を評価すると同時に、各論点を実証的に深め、それらを連関させて全体の議論を構築する上での課題を指摘しました。［宇山］

4月6日：後藤正憲

報告：Land improvement as a front of humans and nature: From Sakha case

コメンテータ：Susan A. Crate (George Mason University)

このペーパーは、ソヴィエト化以前のサハ人が森林を焼いたことによるアラース（森に囲まれた草地）の形成と、ソ連時代に科学技術を用いそれぞれの場所の条件に合わせて行われた土

地改良を、人間と自然の関係という観点から対比するもので、ソ連崩壊後の穀作の減少や土地税の引き上げなどによる土地改良の衰退過程も論じています。コメンテータからは、ペーパーの主目的を明確にし、サハ人の伝統的知識にも注目する必要性が指摘されました。参加者からは、ソ連時代の土地改良はコストがかかりサステイナブルではなかったのではないかという疑問と、アラースが主として人工的に作られたという見方と先行研究の違いや、増税の理由を調べる必要についての指摘を含め、研究をさらに深めることを期待する方向でのコメントが出されました。［宇山］

非常勤研究員セミナー

3月28日：中澤拓哉

報告：日本・モンテネグロ関係の濫觴：幕末および明治期における外交と言説

コメンテータ：宇野真佑子（東京大学大学院博士課程）

このペーパーは、幕末・明治初期の日本の新聞・書籍におけるモンテネグロに関する記述、1880年代のロシアを介しての接触（皇族とモンテネグロ公の面会や勲章のやり取り）、1890年以降の日本の外交官・軍人のモンテネグロ訪問、政治的言説におけるモンテネグロ像について、さまざまな史料に散在する情報を丹念に集めたものです。コメンテータからは、各新聞の性格とモンテネグロ観の関係や、武勇の民というモンテネグロ観は他のバルカン諸国に関する見方と共通していたのかという質問がありました。これに対しては、新聞による違いはあまりない、モンテネグロについてはオスマン帝国から自立した政治単位であったことが評価され、中世には立派な帝国だったが滅ぼされたセルビア、ブルガリアに対する見方とは異なるとの答えでした。参加者からは、ロシアによる仲介の役割は大きなものだったのか、何か意図があったのか、日本人訪問者たちの目的は何だったのかなど、論点を深めることに資する質問・意見が出されました。［宇山］

研究会活動

センターニュース164号以降、センターでおこなわれた諸研究会活動は以下の通りです（公開講座・施設公開は除く）。

3月8日　「スラブ・ユーラシア地域を中心とした総合的研究」共同研究班「近現代の中央ユーラシアに関する共同研究」報告会　吉村貴之（東京大）「ナゴルノ・カラバフ問題の再浮上：ペレストロイカ以前のソヴィエト・アルメニアを中心に」

3月8日　日本国際フォーラム緊急座談会（SRC後援）「ロシアのウクライナ侵攻を考える：国際社会に与えた衝撃と今後の課題」　松嵜英也（津田塾大）、袴田茂樹（安全保障問題研究会）、廣瀬陽子（慶應義塾大）、常盤伸（東京新聞）、宇山智彦（SRC）、杉田弘毅（共同通信）

3月10日　緊急セミナー（Imam Sadiq University/SRC共催）“Geopolitics of Eurasia after Russian Attack on Ukraine”　宇山智彦（SRC）、Mohammad Hassan Khani (Imam Sadiq University)

3月10日　「スラブ・ユーラシア地域におけるメディア文化史の共同研究」主催セミナー　ジェーン・プリチャード（ヴィクトリア・アルバート博物館）「アレクサンドル・シリャーエフ：知らざれるアーティスト、キャラクター・ダンサー、フィルム制作のパイオニア」

3月12日　SRC緊急セミナー　中村唯史（京都大）「ウクライナ：ロシア文学・文化からの視点」

3月13日　SRC緊急セミナー　松下隆志（岩手大）「現代ロシア文学の中のプーチン像」

3月16日　SRCセミナー　Andrii Krawchuk (University of Sudbury / President of ICCEES) “Putin’s War against Ukraine: the Religious Dimension”

3月16日　外務省（SRC共催）オンラインセミナー「中央アジア・コーカサスにおける環境問題と日本の役割」（「中央アジア＋日本」対話・第7回専門家会合、日本・中央アジア・コーカサス諸国外交関係樹立30周年記念事業）　基調講演　川端良子（東京農工大）　セッション1「中央アジア及びコーカサス地域の水・土壌と社会」　モデレーター：地田徹朗（名古屋外国語大／SRC）、日本側報告者：峠嘉哉（東北大）、招待国からの報告：ウズベキスタン、カザフスタン、トルクメニスタン　セッション2「気候変動と山岳環境の持続可能な将来」　モデレーター：宇山智彦（SRC）、日本側報告者：奈良間千之（新潟大）、招待国からの報告：アルメニア、キルギス、タジキスタン　セッション3「日本と中央アジア・コーカサス地域の協力：二国間クレジットの地域的潜在性」、モデレーター：武田善憲（外務省中央アジア・コーカサス室）、日本側報告者：佐藤盟信（外務省気候変動課）、宇賀まい子（環境省地球環境局地球温暖化対策課市場メカニズム室）、石原雅美（公益財団法人地球環境センター（GEC））、招待国からの報告：アゼルバイジャン、ジョージア

3月17日　客員研究員セミナー　塩谷哲史（筑波大）「19世紀中葉ロシア・ヒヴァ関係史：カザフ草原における境界画定をめぐって」

3月18日　第40 回スラブ・ユーラシア研究センター公開講演会　岩下明裕（SRC）「コロナ・境界・地政治：私たちがいま考えるべきこと」

3月25日　オンラインシンポジウム「ウクライナ戦争の背景とその波紋：我々は今どこにいるのか」（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所「イスラーム信頼学」プロジェクトとの共催）　青島陽子（SRC）「ウクライナ戦争の歴史的位相」、長縄宣博（SRC／東京外国語大）「長い20世紀の終焉とウクライナ戦争」、野田仁（東京外国語大）「東からの視点：中国、カザフスタン、ロシアの位相」、黒木英充（東京外国語大／SRC）「中東地域との危険な共鳴」、佐原徹哉（明治大）「ウクライナ侵略と世界の多極化」

3月26日　ワークショップ「アフガニスタン問題と越境的イスラーム主義の起源」（「イスラーム信頼学」プロジェクトとの共催）　田中浩一郎（慶応義塾大）「イスラーム革命とアフガニスタンをめぐる諸紛争：地域パワーバランスとイスラーム主義の影響」

3月29日　SRC共同利用・共同研究拠点公募研究（プロジェクト型）セミナー「昭和のロシア：日ソ文化外交と戦後日本のロシア観形成に関する研究」　半谷史郎（愛知県立大）「ソ連の生ワクチンが日本に残したもの」、巽由樹子（東京外国語大）「1960－80年代日本へのソ連美術紹介：三越と西武の役割を通して」

4月16日　SRCセミナー　Evgeny Dobrenko (Università Ca' Foscari Venezia) “Агония российской автократии: Сталинизм - Путинизм - Сталинизм”

4月20日　OSW-SRC Special Seminar: “War in Ukraine and beyond: Polish and Japanese Perspectives and Recommendations”　Paweł Milewski (Ambassador of Poland to Japan), Adam Eberhardt (Center for Eastern Studies (OSW), Poland), Akihiro Iwashita (SRC), Wojciech Konończuk (Center for Eastern Studies, Poland), Shinichiro Tabata (SRC)

5月20日　北海道スラブ研究会　藤森信吉（SRC）「沿ドニエストルの苦悩：ウクライナ・ロシア戦争の周辺」

5月20日　M. Khodarkovsky教授研究セミナー（「イスラーム信頼学」プロジェクトとの共催）Michael Khodarkovsky (Loyola University Chicago / SRC) “Empires of the Steppe: Eurasian Empires in Comparative Perspective, 1500–1900”

5月27日　UBRJ/EESオンラインセミナー「林忠行『チェコスロヴァキア軍団：ある義勇軍をめぐる世界史』を読む」　補論:林忠行（京都女子大）「チェコスロヴァキア独立運動とウクライナ」、コメンテーター：天野尚樹（山形大）、井上岳彦（SRC）

5月28日　UBRJ実社会共創セミナー/名古屋外国語大学世界共生学科・WLAC共催企画　「ウクライナ戦争を考える：世界や日本はどう向き合うべきか」　黒岩幸子（岩手県立大）「なぜロシアは侵攻したのか」、岩下明裕（SRC）「国際秩序は今後、どうなるのか」、地田徹朗（名古屋外国語大）「旧ソ連圏はどのようにこれを見ているのか」、大茂矢由佳（筑波大大学院博士後期課程）「日本の人道保護の観点から」

6月6日　国際ワークショップ「比較帝国史：ユーラシアとアメリカからの視点」　Antony G. Hopkins (University of Cambridge) “American Empire in Global History”、Michael Khodarkovsky (Loyola University Chicago / SRC) “Where Russia Was ‘Ahead’ of Europe: Russia’s State Colonialism in Comparative Perspective”、井上岳彦（SRC）“How Imperial Powers Addressed Foreign Spiritual Authorities: The Case of the Russian Empire and the ‘Tibetan Buddhist World’”、秋山徹（北海道教育大釧路校）“Topographic Factors in Empire/State-Building in Modern Tian Shan: A Preliminary Analysis”

6月6日　兵庫県立大学政策科学研究所シンポジウム（SRC）「ウクライナ侵攻後の世界経済：ロシア・中国・インド」　講師：岡部芳彦（神戸学院大）、田畑伸一郎（SRC）、星野真（駒澤大）、福味敦（兵庫県立大）

6月10日　SRCセミナー　Renee Perelmutter (University of Kansas) “Nonbinary Language Innovations in Russian: Globalization and Identity”

6月13日　書評会「中塚武『気候適応の日本史』を読む」　諫早庸一（SRC）「趣旨説明：歴史学と古気候学をつなぐ」、中塚武（名古屋大）「なぜ気候適応の「通史」をめざすのか？」、佐藤雄基（立教大）「「中周期」の気候変動と中世日本：記憶と統治」、西村陽子（東洋大）「気候変動と中国史の展開」

6月21日　UBRJ/EES実社会のための共創研究セミナー「法と社会から考える：ロシアのウクライナ侵攻」　山田哲也（南山大）「国際法からみたロシアのウクライナ侵攻」、岩橋誠（NPO法人POSSE）「日本における難民支援に関する現状と課題」

6月22日　SRC/HU School of Humanities and Human Sciences Joint Seminar: Frontiers in Armenian Studies　Hrach Martirosyan (Independent Researcher) “The Place of Armenian in the Indo-European Language Family (with a Special Emphasis on Greek, Indo-European, and Balto-Slavic)”; 浜田華練（東京大）“Armenian Black Sea: The Local History of the Armenian Communities in the Black Sea Region in “History of Pontos” by Minas Bzhshkean (1777–1851)”

6月24日　第41 回スラブ・ユーラシア研究センター公開講演会　黒木英充「21世紀の東方問題：アフガニスタンからウクライナへ」

6月28日　北海道スラブ研究会　ベクトゥルスノフ・ミルラン（SRC）「『遊牧民的社会主義』の実践：ソヴィエト政権下におけるクルグズ人の定住化と集団化（1930－1950年代）」、清沢紫織（SRC）「1つの言語の2つの姿：現代ベラルーシ語の標準語化をめぐって」

6月29日　SRCセミナー「作家であり所有者でもある：ロシア帝国における土地、著作権、作者」　Edyta Bojanowska (Yale University / SRC) “Was Tolstoy a Colonial Landlord? The Dilemmas of Private Property and Russia's Settler Colonialism on the Bashkir Steppe”; Kirill Zubkov (SRC) “‘Infringing All My Rights, Even Property’: Ivan Goncharov and the Problem of Copyright in the Russian Empire”

6月30日　EES/UBRJ実社会のための共創研究セミナー「ロシアのジェンダー状況：過去から現在へ」　五十嵐徳子（天理大）「ロシアのジェンダー状況：過去から現在へ」

人事の動き

研究員の異動

井上　岳彦	特任助教	2022年3月31日（退職）
村上　智見	特任助教	2022年7月1日（採用）
宮崎　千穂	非常勤研究員	2022年3月31日（退職）
中澤　拓哉	非常勤研究員	2022年3月31日（退職）
清沢　紫織	非常勤研究員	2022年4月1日（採用）
Bektursunov, Mirlan	非常勤研究員	2022年4月1日（採用）
末森　晴賀	学術研究員	2022年6月1日（採用）

2022年度の客員教授・准教授

公募していました2022年度客員教授・准教授は審査の結果、次の7名の方々にお願いすることになりました。［事務係］

客員教授

氏名	所属	研究テーマ
Renat Bekkin	Professor, Institute of Oriental studies, Herzen University, St. Petersburg, Russia	Best of both worlds? Tatar Muslim migrants in the northern Baltic Sea region, integration, impact and transnational strategies
金野　雄五	北星学園大学経済学部教授	世界的な脱炭素へのロシア政府の対応
Tomasz Kamusella	Reader in Modern History, University of St Andrews Scotland, UK	Where Does Central Europe Terminate in the North and the South?

客員准教授

氏名	所属	研究テーマ
中井　遼	北九州市立大学法学部　准教授	バルト諸国の政党・有権者関係についての複合的研究
Magdalena Grabowska	Associate Professor, Institute of Philosophy and Sociology, Polish Academy of Sciences	(Re) Democratization Processes and Intersectional Social Justice in Post-Socialist Eastern Europe
巽　由樹子	東京外国語大学大学院総合国際研究大学院　准教授	帝政期ロシア語出版の多元性とネットワークに関する研究
Borrero Mauricio	Associate Professor, Department of History, St. John's University, Jamaica, New York	From Judo to Sambo: Vasilii Sergeevich Oshchepkov and the Russian Reception of Japanese Martial Arts, 1910s–1930s

学界短信

学会カレンダー

2022 年	9 月 19–21 日	17th ANNUAL MEETING of the Slavic Linguistics Society (SLS-17)　於北海道大学学術交流会館　https://sites.google.com/elms.hokudai.ac.jp/sls2021/
	10 月 13–14 日、11 月 10–13 日	54th ASEEES (Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies) Annual Convention　オンライン（10月）および於シカゴ（11月）https://www.aseees.org/convention
	10 月 15–16 日	ロシア史研究会2022年度大会　於法政大学市ヶ谷キャンパス https://www.roshiashi.com/annual-conference
	10 月 20–23 日	CESS (Central Eurasian Studies Society) Annual Conference 於インディアナ大学　https://www.centraleurasia.org/conferences/annual/
	10 月 22–23 日	ロシア文学会第72回全国大会　於専修大学神田キャンパス・ハイフレックス　http://yaar.jpn.org
	10 月 28–30 日	日本国際政治学会2022年度研究大会　於仙台国際センター https://jair.or.jp/event/2022index.html

	11 月 5–6 日	ロシア・東欧学会2022年度研究大会　於新潟市内 https://www.jarees.jp
	11 月 12 日	2022年度内陸アジア史学会大会　於広島大学 http://nairikuajia.sakura.ne.jp/SIAS/events/index.htm
	12 月 14–16 日	スラブ・ユーラシア研究センター 2022年度冬期国際シンポジウム　於SRC
2023 年	3 月 31 日 –4 月 2 日	BASEES (British Association for Slavonic and East European Studies) Conference 2023　於グラスゴー大学 https://www.baseesconference.org

大学院だより

北海道大学大学院文学院人文学専攻スラブ・ユーラシア学研究室では、修士課程に 2 名が入学、博士後期課程に 2 名が進学しました。今年度の大学院生は以下の皆さんです。また、ヴィクトリア・アントネンコさんが 6 月に博士号を取得しました。［編集部］

2022 年度スラブ・ユーラシア学講座大学院生名簿

学年	氏名	研究テーマ	指導教員	副指導教員	
D3	小野 瑞絵	旧ソ連圏におけるイスラーム教育と政策の比較	宇山	長縄	仙石
D3	寺岡 郁夫	ウクライナの構成地域とその形成過程	岩下	宇山	田畑
D3	林 健太	ピョートル 1 世時代の官僚出版業と国家出版言語	長縄	野町	安達
D3	中尻 恒光	ロシアにおけるマクロ経済政策に関する研究	田畑	仙石	岩下
D3	上村 正之	19世紀ロシア文学上のコサック・イメージ	安達	宇山	野町
D3	長島 徹	ロシアの国籍政策	岩下	宇山	田畑
D3	布日額	清朝末期モンゴルのナショナリズムと日露両帝国	宇山	ウルフ	長縄
D2	新井 洋史	北東アジアにおける国際協力を通じた地域開発政策	田畑	岩下	仙石
D2	王 雨寒	中国と中央アジアの文化交流に関する考察	宇山	長縄	岩下
D2	金 盾	中ロ両国における日系小売業の発展	田畑	岩下	仙石
D2	鄭 米芝	競争的権威主義と体制の安定性：プーチン政権下のロシアを中心に	宇山	仙石	岩下
D1	松元 晶	1960年代中央アジアの自己表象	宇山	安達	長縄
D1	李 暢	日露中文化交流からみる19世紀末から20世紀中葉にかけてのハルビンのコスモポリタニズム	長縄	ウルフ	安達
M2	荒濤 理沙	ヤン・コラールの汎スラヴ主義思想から見る19世紀中東欧における民族言語像	青島	ウルフ	野町
M2	ウツォワ・マリア	極東ロシアの官民パートナーシップへの北海道の経験の適用	田畑	岩下	
M2	三栖 大明	レフ・グミリョフの思想における「スーパーエトノス」概念の分析	青島	宇山	

M1	根来 朝陽	帝政末期サハの民族アイデンティティ形成に対する流刑者の貢献	長縄	宇山	ウルフ
M1	山田 愛実	ポーランドにおける反ユダヤ主義	仙石	青島	

図書室だより

Archives UnboundおよびDigital National Security Archiveの導入について

スラブ・ユーラシア研究センターは、2021 年初めから 2022 年初めにかけて、以下のオンライン・データベースを導入しましたので、お知らせします。

Archives Unbound から、
・Cold War: Voices of Confrontation and Conciliation
・Commercial and Trade Relations Between Tsarist Russia, the Soviet Union and the U.S., 1910–1963
・Country Intelligence Reports/State Department's Bureau of Intelligence and Research Reports China (1941–1961)
・Country Intelligence Reports/State Department's Bureau of Intelligence and Research Reports USSR (1941–1961)
・The Ford Administration and Foreign Affairs
・George H. W. Bush and Foreign Affairs: The Moscow Summit and the Dissolution of the USSR
・Poland: Records of the U.S. Department of State, 1945–1963
・Finland: Records of the U.S. Department of State Relating to Internal Affairs, 1945–Jan. 1963
・International Climatic Changes and Global Warming
Archives Unbound は、アメリカ国立公文書館等米英の公文書館資料等を収録した、Gale 社が提供するデータベースです。

Digital National Security Archive から、
・China and the United States: From Hostility to Engagement, 1960–1998
・CIA Family Jewels Indexed
・The Cuban Missile Crisis: 50th Anniversary Update
・Japan and the United States: Diplomatic, Security, and Economic Relations, 1960–1976
・Japan and the United States: Diplomatic, Security, and Economic Relations, 1977–1992
・Japan and the United States: Diplomatic, Security, and Economic Relations, Part III, 1961–2000
・Presidential Directives on National Security, Part I: From Truman to Clinton
・Presidential Directives on National Security, Part II: From Truman to George W. Bush
・The Soviet Estimate: U.S. Analysis of the Soviet Union, 1947–1991
・Soviet-U.S. Relations: The End of the Cold War, 1985–1991
Digital National Security Archive は、アメリカ政府機関の文書を収集・公開する非営利団体 The National Security Archive（NSA、アメリカ国家安全保障アーカイブ）が、ProQuest 社の協力の下、収集した文書から特に重要な文書を選んで収録したものです。

Brill Primary Sources から、
・Cold War Intelligence: Secret War between the US and the USSR, 1945–1991

以上のデータベースは、北海道大学のキャンパス・ネットワークに接続して利用可能で、北大附属図書館ウェブサイトのデータベース一覧 https://www.lib.hokudai.ac.jp/databases/ からリンクされています。

堀江家史料の受贈

この５月に、京都市の堀江満智さまより、祖父堀江直造（1870–1942）、ご父君堀江正三（1898–1963）、および大河内門三郎（1859–1936）各氏にまつわる史料類をセンター図書室にご寄贈いただきましたので、お知らせ申し上げます。

堀江直造は舞鶴の出身で、1892 年にウラジオストクに渡りました。雑貨・果物輸入、缶詰製造などを営んで繁盛し、1910 年代に入ると浦潮居留民会の副会頭、会頭を務めるなど、現地日本人社会のまとめ役として活動するようになりました。しかし、シベリア出兵中の 1921 年にすべての公職を辞し、日本軍の沿海州撤兵（1922 年 10 月）の前に商売をたたんで帰国しました。

史料の受贈にあたって、堀江宅前にて。
立ち合いいただいた藤本和貴夫氏、堀江満智様、立石洋子氏

直造の養子正三は、1919 年に東京外国語学校ロシア語科を卒業後、ウラジオストクを経てカムチャツカのペトロパヴロフスクに入り、そこに堀江商店の支店を設けました。しかし 1922 年に帰国し、その後は朝日新聞大阪本社に勤めました。

大河内門三郎は大阪の人で、日露戦争中、陸軍通訳として臨時測図部に勤務し、次いでサハリン島上の北緯 50 度国境線画定作業に参加しました。その後大阪を本拠に毛皮商を営み、極東ロシア各地と取引していたもようで、ウラジオストクの堀江家とも親しく交際したことが、寄贈いただいた史料からうかがわれます。

今回受贈した史料は、直造および妻萬代の日記その他の文書、写真類、正三の日記と手帳、同窓会名簿、および大河内氏の家に伝わった文書（辞令等）、絵葉書、書簡、地図等からなるものです。

いずれも、明治・大正期の日露関係に関わる貴重な史料であり、永く保存し公開していきたいと考えております。

参考文献：堀江満智『遥かなる浦潮：明治・大正時代の日本人居留民の足跡を追って』新風書房、2002 年。原暉之「第 9 章 大戦と革命と干渉：在ロシア日本人ディアスポラの視点から」五百旗頭真ほか編『日ロ関係史：パラレル・ヒストリーの挑戦』東京大学出版会、2015 年。［兎内］

ソ連共産党・国家文書マイクロフィルムの購入完了

ソ連崩壊後の 1992 年、アメリカのフーヴァー研究所とチャドウィック・ヒーリー社、およびロシア連邦国家文書館局（ロスアルヒーフ）の共同プロジェクトとして、モスクワの 3 つの文書館、すなわち、ЦХСД（現代史文書センター、現 РГАНИ ロシア国家現代史文書館）、РЦХИДНИ（ロシア現代史文書保存研究センター、現 РГАСПИ ロシア国家社会政治史文書館）、および ГАРФ（ロシア連邦国家文書館）の所蔵文書を、大規模にマイクロ化して販売することになり、これまでのニューズレターですでにお知らせの通り、本センターも 1995 年度からこのフィルムの購入を開始しました。

残念ながら、このプロジェクトは短命に終わり、3 つの文書館の保存史料のごく一部しか製品化されずに終わりました。しかしそれでもゆうに 1 万巻を超える規模があり、センターとしてはなかなか全巻を揃えるにはいたらず、2020 年初めの時点で 4,000 巻以上が未収となっていました。

しかし、2020 年度から 2021 年度にかけて、代理店の紀伊国屋書店様より特別条件を設定いただき、また、コロナによる人流抑制という状況もあって、残りのフィルムの大半を購入することができましたので、報告させていただきます。

なお、2020 年度、2021 年度の購入分は、現在附属図書館にて整理中ですが、必要に応じて利用者に提供できるようにしてまいります。［兎内］

編集部だより

Acta Slavica Iaponica

前号に続き作業に遅れが出ている第 43 号ですが、現在編集作業の最終段階に入っています。力作の 7 本の論文、1 本の講義、9 本の書評が確定している、充実した号になります。昨年はアドバイザリーボードの有力メンバーが 2 名他界するという、ASI にとって非常に悲しく損失の大きい年でした。第 43 号からはライナ・ドラギチェビッチ先生（ベオグラード大学、言語学）、マリナ・バリナ先生（イリノイ・ウェズリアン大学、文学）を新メンバーにお迎えし、本誌の質向上のための協力体制の充実を図って参ります。次号の締め切りは 2022 年 7 月 17 日（日）です。ふるってご投稿ください。［野町］

『スラヴ研究』

『スラヴ研究』第 69 号は 11 本の投稿のうち、以下の力作を掲載することになりました。現在、校正作業が進行中です。お待たせして申し訳ございません。

［論文］

宇野真佑子　体制転換期クロアチアにおける第二次世界大戦をめぐる記憶の政治：「和解」の論理と「ヨーロッパへの回帰」

松本祐生子　戦後スターリン期における独ソ戦の記憶：レニングラード防衛博物館に着目して

大場佐和子　ボスニア・ヘルツェゴヴィナ憲法裁判所のジレンマ：民族主義とデイトン憲法擁護義務の狭間で

［研究ノート］

張彬彬　ニクソン・ショック後の日ソ関係再考：グロムイコ訪日から田中訪ソまで（1971–1973）

徳永昌弘　国家主導性と経済性の相克：ウズベキスタンにおける国家語と共通通商語に焦点を当てて

［書評］

石本雅之　S. B. リーグ著『ロシアの複雑な包容：帝政ロシアとアルメニア人（1801–1914）』

丁寧な査読をしてくださったレフェリーの皆様に御礼を申し上げます。残念ながら不採用となった方も、次回以降ぜひ再挑戦して下さい。次の第 70 号の原稿締め切りは、2022 年 8 月末の予定です。センターのホームページに掲載されている投稿規程・執筆要領等を熟読のうえ、締切厳守でご提出ください（事前申し込みは不要です）。なお、次号から編集長が青島陽子に代わりますので、ハードコピーはセンターの青島宛に、電子ファイルは、src.slavicstudies@gmail.com にお送りください。［長縄・青島］

『境界研究』

2022 年春に『境界研究』No. 12 が発行されました。［岩下］

［論文］

小野一　放射性廃棄物管理政策研究のパラダイム転換を求めて

坂田敦志　「東」と「西」のはざまで：ポスト社会主義のチェコ共和国に現れた「第3の立場」

井上岳彦、斎藤祥平　あるロシア系収容者のミュンヘン難民キャンプ：米ソ対立のはじまりと「置き場のない人々」

［研究ノート］

古川浩司　日本の境界地域研究と実務の協働：JIBSN の 10 年間を振り返る

［特集：ウポポイの／での研究］

地田徹朗　特集「ウポポイの／での研究」刊行にあたって

小坂田裕子　博物館展示における先住民族との協働：国立アイヌ民族博物館と国立アメリカ・インディアン博物館の比較

立石信一　「議論の場」としての博物館の構築に向けて：国立アイヌ民族博物館での展示における試み

是澤櫻子、マーク・ウィンチェスター　ウポポイと報道：道内新聞を中心とした内外発信における類似と相違分析に向けて

貳又聖規　ウポポイでの学び、ウポポイへの期待：「多文化共生のまちづくり」の視点から

田村直美　ウポポイの向こう側に見える白老

山丸賢雄　自分なりの文化伝承者を目指して：ウポポイとわたしのこれから

［書評］

木村崇　塩川伸明著『国家の解体　ペレストロイカとソ連の最期　I, II, III』

会　議

センター協議員会

2021 年度第 11 回協議員会　3 月 18 ～ 24 日（メール会議）
議題
1. 地域研究に関わる戦略的発展のためのパートナーシップ協定書について

2022 年度第 1 回協議員会　4 月 27 日（オンライン開催）
議題
1. 教員の人事（2 件）について

2022 年度第 2 回協議員会　5 月 18 日（オンライン開催）
議題
1. 教員の人事（2 件）について

2022 年度第 3 回協議員会　5 月 18 ～ 23 日（メール会議）
議題
1. 教員の人事（2 件）について

2022 年度第 4 回協議員会　5 月 31 日（オンライン開催）
議題
1. 教員の人事について
2. 研究生の受け入れについて

2022 年度第 5 回協議員会　6 月 1 ～ 6 日（メール会議）
議題
1. 教員の人事について

［事務係］

誰が 何を どこで

2021 年度の専任研究員、助教、客員教員、非常勤研究員（五十音順）の研究成果・研究余滴のアンケート調査を以下のようにまとめました。［宇山］

青島陽子　¶ 3 著書　▼ (co-edited with Darius Staliūnas) *The Tsar, the Empire, and the Nation: Dilemmas of Nationalization in Russia's Western Borderlands, 1905–1915*, 400 (Budapest: Central European University Press, 2021)　¶ 5 学会報告・学術講演　▼ Radical Protests at Imperial Schools in the Western Border Regions Around 1905, ICCEES 10th World Congress, online (2021.8.6)　▼ロシア帝国のナショナル・イマジネーション , 第 38 回スラブ・ユーラシア研究センター公開講演会、オンライン (2021.9.17)　▼ウクライナ戦争の歴史的位相 , イスラーム信頼学シンポジウム「ウクライナ戦争の背景とその波紋：我々は今どこにいるのか」, オンライン (2022.3.25)

安達大輔　¶ 2 その他業績（論文形式）（5）その他　▼コラム「決闘」（沼野充義・沼野恭子・平松潤奈・乗松亨平編『ロシア文化 55 のキーワード』200, ミネルヴァ書房 , 2021）▼［ウクライナ危機］「露と一体」歴史歪めた主張（『読売新聞』2022 年 3 月 19 日夕刊）¶ 5 学会報告・学術講演　▼ Melodrama and Irony in 1830s Russia, Special Session on 19th-century Russian Melodrama with Views from Japan, c19c Cross Cultural Circa Nineteenth Century Research Centre, University of St Andrews, online (2021.4.14)　▼ Nature's Mistake: Gogol's Writing as Self-Reflection of Photography, SRC 2021 Summer International Symposium "Slavic and Eurasian Studies in Times of Uncertainty: Dialogue and Reappraisal," online (2021.7.5)　▼ From Moral to Love? On the Melodramatic Imagination in Late Nineteenth-Century Russian Drama, ICCEES 10th World Congress, online (2021.8.7)　▼ 19 世紀ロシアのメロドラマ , 2021 年度 SRC 公開講座「メロドラマするロシア：アジアとの比較から考える大衆文化の想像力」第 1 回 , オンライン (2021.10.4)　▼ヤーコフ・プロタザーノフ：帝政ロシアとソ連が愛したメロドラマ監督 , 第 39 回スラブ・ユーラシア研究センター公開講演会 , オンライン (2021.12.17)

諫早庸一　¶ 1 学術論文　▼ Geometrizing Chinese Astronomy? The View from a Diagram in the *Kashf al-ḥaqā'iq* by al-Nīsābūrī (d. ca. 1330) (Bill Mak & Eric Huntington, eds., *Overlapping Cosmologies in Asia: Transcultural and Interdisciplinary Approaches*, 139–169, Leiden: Brill, 2022)　▼「大遷移」のユーラシア的文脈：朴興植氏の議論に寄せて（日韓歴史家会議組織委員会編『伝染病と歴史：第 21 回日韓・韓日歴史家会議報告書』71–78, 日韓文化交流基金 , 2022）　▼「ユーラシアから考える〈一四世紀の危機〉」『史苑』82 (2): 185–211 (2022)　¶ 2 その他業績（論文形式）（3）書評　▼ヴァレリー・ハンセン『西暦一〇〇〇年：グローバリゼーションの誕生』（文藝春秋 , 2021 年）『日本経済新聞』(2021.6.26)　▼ Sholeh Quinn, *Persian Historiography across Empires: The Ottomans, Safavids, and Mughals* (Cambridge: Cambridge University Press, 2021)『日本中央アジア学会報』17: 47–54 (2021)　▼岡田英弘『漢字とは何か：日本とモンゴルから見る』（藤原書店 , 2021 年）『産経新聞』(2021.9.26)　（5）その他　▼モンゴルの覇権と危機：「14 世紀の危機」とは何か（吉澤誠一郎監修『論点・東洋史学：アジア・アフリカへの問い 158』146–147, ミネルヴァ書房 , 2022）　▼科学交流の交流：天文学・医学はどのように相互交流したのか（同書 , 150–151）　¶ 5 学会報告・学術講演　▼中国天文学を幾何学化すること：ニザーム・アッディーン・ニーサーブーリー『真理の解明』（1308 年頃）における試み , 慶應義塾大学言語文化研究所イスラーム・セミナー , オンライン (2021.6.4)　▼三水系の帝国としてのジョチ・ウルス , 北海道中央ユーラシア研究会第 141 回例会 , オンライン (2021.8.26)　▼独リト雖モ天ニ近シ：ニザール派山岳政権（1090 ～ 1256 年）における天文学 , 第 12 回海域ヨーロッパ研究会 , オンライン (2021.9.5)　▼ Network Cut Off: The Marāgha Observatory and the Tūsī Family, 5th Meeting of the Mongol Empire Spring Series "By Land & By Sea: Cultural and Other Networks of Exchange in Mongol Eurasia and Beyond, online (2021.9.13)　▼「大遷移」のユーラシア的文脈：朴興植氏の論考に寄せて , 第 21 回日韓歴史家会議「伝染病と歴史」, オンライン (2021.11.12)　▼ Knowledge-Integration vs. Knowledge-Conversion: Mongols' Imperial Attitude toward Sciences, The Mongol Empire's Zoominar "Knowledge and Empire," online (2021.12.17)　▼ The Afro-Eurasian Crisis of the 14th Century in the Ilkhanid Context, The Korean Association for Mongolian Studies, Spring International Conference 2022 "Globalization and Localization of Mongolian Studies," online (2022.3.25)

岩下明裕　¶ 1 学術論文　▼変貌の 30 年・なぜいま北東アジアなのか？（岩下明裕編『北東アジアの地政治：米中日ロのパワーゲームを超えて』1–15, 北海道大学出版会 , 2021）▼再領域化される地域：ハイブリッドな未来を見つめて（同書 , 187–212）　¶ 2 その他業績（論文形式）（5）その他　▼はしがき：国道五八号線物語（平井一臣編『知られざる境界のしま・奄美』2–4, 北海道大学出版会 , 2021）　▼改訂版によせて（池田福重『無学日記』

i–ii, 共同文化社 , 2022 年）　¶ 3 著書　▼（編）『北東アジアの地政治：米中日ロのパワーゲームを超えて』iv+300（北海道大学出版会 , 2021）

井上岳彦　¶ 1 学術論文　▼（斎藤祥平と共著）ロシア系収容者のミュンヘン難民キャンプ：米ソ対立のはじまりと「置き場のない人々」『境界研究』12: 55–76 (2022)　¶ 2 その他業績（論文形式）（5）その他　▼ (with Y. Ishihama) A Study of Three Tibetan Letters Attributed to Dorzhiev held by the St. Petersburg Branch of the Archive of the Russian Academy of Sciences (Ishihama Yumiko and Alex McKay, eds., *The Early 20th Century Resurgence of the Tibetan Buddhist World: Studies in Central Asian Buddhism*, 135–165, Amsterdam: Amsterdam University Press, 2022)　▼ Buddhist Devotion to the Russian Tsar: The Bicultural Environment of the Don Kalmyk Sangha and Russian Orthodox Church in the 1830s (Ibid, 189–201)　▼ウマを愛でる歴史：ソ連・ロシアの経験は牧畜をどう変えたのか（シンジルト編『写真にみる牧畜社会』13, 32–43, 風響社 , 2022）　¶ 5 学会報告・学術講演　▼インテリジェンスと信仰心のはざまで：東洋学の担い手としてのロシア帝国仏教徒 ,「グローバル・ヒストリー研究の新たな視角」公開講演会 , 早稲田大学高等研究所 , オンライン (2021.6.5) ▼ひげはあるか：社会主義的ユーラシア遊牧英雄像 ,「社会主義文化と身体のイメージ：ユーラシアにおける英雄・女性・死者の表象比較研究」研究会 , オンライン (2022.1.29)

宇山智彦　¶ 1 学術論文　▼ Влияние перемен периода перестройки на становление политических систем стран Центральной Азии: чувство угрозы и авторитаризм, *Международная аналитика* 12(1): 55–73 (2021)　▼学問の自由と有用性・効率性の間で：科学者代表機関の役割の歴史と現在『歴史学研究』1015: 185–195 (2021)　▼中央アジアの新型コロナ問題と国際関係：減速する世界？（川島真、池内恵編『新興国から見るアフターコロナの時代：米中対立の間に広がる世界』157–170, 東京大学出版会 , 2021）　▼（小野亮介と）カザフ自治政府アラシュ・オルダとシベリア出兵期日本の邂逅と齟齬：マルセコフ要請書と関連史料から見る背景（小野亮介、海野典子編『近代日本と中東・イスラーム圏：ヒト・モノ・情報の交錯から見る』127–199, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 , 2022）　¶ 2 その他業績（論文形式）（1）総説・解説・評論等　▼中央アジア「国際テロ」と「グレートゲーム」の虚実：アフガニスタン近隣諸国の多様な国益『外交』69: 44–49 (2021)　▼クルグズスタン（キルギス）の波乱の 30 年：エリートの分裂による不安定な「民主主義」,『ユーラシア研究』64: 32–34 (2021)　▼カザフスタン動乱にみる国民の不満と権力闘争：ナザルバエフ体制解体の試練『外交』71: 73–77 (2022)（2）研究ノート等　▼ Understanding the Kazakh Autonomy of the Alash Orda Multifacetedly: Enlightenment, Post-Imperial Citizenship, and International Contexts (В. Н. Вдовин, ed., *Диалог культур Востока и Запада через призму единства и многообразия в преемственности и модернизации общественного сознания: Древний мир, Средневековье, Новое и Новейшее время*, 167–173, Алматы: Институт философии, политологии и религиоведения КН МОН РК, 2021)　（3）書評　▼熊倉潤著『民族自決と民族団結：ソ連と中国の民族エリート』,『ロシア史研究』106: 132–139 (2021)　（5）その他　▼アフガニスタン情勢への対応に関する提言：中央アジア研究者の視点から」日本国際フォーラム「ユーラシアダイナミズムと日本外交」研究会コメンタリー (2021.9.13) https://www.jfir.or.jp/studygroup_article/5699/（英訳：Recommendations for Responding to the Current Situation in Afghanistan: From the Perspective of an Expert on Central Asia, *GFJ Commentary* 104 (2021.12.1) http://www.gfj.jp/e/commentary/211201.html）　▼不安定だが大きな脅威ではない隣人：中央アジアから見たアフガニスタン , *nippon.com* (2021.11.16) https://www.nippon.com/ja/in-depth/a07804/　▼タジキスタンとソ連と『少年、機関車に乗る』(『中央アジア今昔映画祭』トレノバ , 32–34, 2021)　▼ Is Afghanistan Really Exporting Terror to Central Asia? *The Diplomat* (2021.12.12) https://thediplomat.com/2021/12/is-afghanistan-really-exporting-terror-to-central-asia/　▼ Правила «Новой Большой игры», *Эксперт*, специальный доклад «Центральная

Азия: 30 лет независимости», 59 (13.12.2021) https://expert.ru/get_issue_pdf/4611/ ▼ソ連崩壊30年の現在地 再び大国化 19世紀的「競存」へ『朝日新聞』(2021.12.22) ▼節度失う政治「裏」が表に［プーチン政治について］『北海道新聞』(2022.2.12) ▼二つの国の歴史 プーチン「一面的な歴史観」で侵攻 ウクライナ存在の正当性を否定『AERA』25(12): 14–15 (2022.3.14) ¶ 5学会報告・学術講演 ▼学問の自由と有用性・効率性の間で：科学者代表機関の役割の歴史と現在，歴史学研究会大会特設部会，オンライン (2021.5.29) ▼ Cooperation and Hostility between Kazakh Nationalists and Bolsheviks: The Alash Orda's Legacies in Early Soviet Central Asia, Conference "Early Soviet Central Asia," Silk Roads Programme, King's College, University of Cambridge, オンライン (2021.6.10) ▼ A Northern Global South or a Global East? Post-Soviet Area Studies in the Age of Neoliberalism and Great Power Competition, SSEES & SRC Seminar "Rethinking Slavic Area Studies from the Opposite Edges of Eurasia," オンライン (2021.12.6) ▼中央アジア諸国の曖昧な強権体制：ソ連崩壊の残響と国家間競争の中で，ユーラシア研究所総合シンポジウム「ソ連解体後の30年」，オンライン (2021.12.18) ▼ Non-coordinated but Harmonized Coexistence of China and Russia in Third Countries: The Case of Central Asia, GMF (The German Marshall Fund of the United States) Workshop "Crafting Shared Approaches to China-Russia Relations," オンライン (2022.1.25) ▼ How to Make the International Community of Central Asian Studies Coherent? Overcoming the Gap between the Western-centrism and Nationalism, University of Tsukuba Special Lecture and Discussion Series "Central Eurasian Studies in East Asia and Beyond," オンライン (2022.2.14) ▼プーチンの歴史観：非合理な侵攻の動機は何か，日本国際フォーラム緊急座談会「ロシアのウクライナ侵攻を考える：国際社会に与えた衝撃と今後の課題」，オンライン (2022.3.8)

ウルフ・ディビッド（David Wolff） ¶ 5学会報告・学術講演 ▼ From the Jungle to the Golden Gate: The Exclusion and Redemption of White Russian Refugees from China, 1945–1951, Conference on Mobilities, Exclusions and Migrants' Agency in the Pacific Realm in a Transregional and Diachronic Perspective organized by German Historical Institute, online (2021.6.9)

後藤正憲 ¶ 2その他業績（論文形式）（3）書評 ▼佐々木史郎・渡邊日日編『ポスト社会主義以後のスラブ・ユーラシア世界：比較民族誌的研究』（2016年，風響社）『文化人類学』86(1): 148–150 (2021) ¶ 5学会報告・学術講演 ▼ Topography of Adaptation: Sakha Native Domestic Animals and Politics of the Environment, International Congress of Arctic Social Sciences (ICASS X), online (2021.6.17) ▼ Land Improvement in the Critical Zone: From the Case of Sakha (Yakutia), Ibid. (2021.6.20)

塩谷哲史 ¶ 1学術論文 ▼ The Association between the Descendants of Sufi Saint Sayyid Ata and the Khans of Khiva at the Beginning of the 19th Century, *Central Asiatic Journal* 64(1–2): 183–195 (2021) ▼ 19世紀中葉のヒヴァ＝ロシア関係再考：シュクルッラー・アガのロシア、オスマン両帝国への派遣について『西南アジア研究』92: 29–47 (2021) ▼近世ホラズムにおける王権と水利『K』3: 40–45 (2022) ▼（磯貝真澄，磯貝健一と共著）中央ユーラシアのムスリムとロシア帝国法：宗務行政と植民地行政（磯貝真澄，磯貝健一編『帝国ロシアとムスリムの法』15–45, 昭和堂，2022） ▼改革と水利：トルキスタンの水利権法（一九一七年）への道程（同書，139–160） ¶ 2その他業績（論文形式）（5）その他 ▼彙報：第57回野尻湖クリルタイ『東洋学報』103(3): 33–37 (2021) ▼イチャン・カラ（駐日ウズベキスタン共和国大使館『ウズベキスタン：シルクロード遺跡の旅』12–13, 駐日ウズベキスタン共和国大使館，2021） ¶ 5学会報告・学術講演 ▼ (with Akira Ueda, Tetsuro Chida, and Fumoto Sono) Indigenous Knowledge of Water Management in Central Asia, ANGIS Tokyo, online (2021.12.4) ▼ 1840年代ヒヴァ・ハン国の対露交渉：捕虜解放、通商、国境の諸問題をめぐって，2021年度東洋史研究会大会，オンライン (2021.11.7)

仙石学　¶ 1 学術論文　▼ジェンダーと反欧州：ポーランドにおける若年層の政治指向『年報政治学 2021-II　新興デモクラシー諸国の変容』72(2): 44–56 (2021)　¶ 2 その他業績（論文形式）（1）総説・解説・評論等　▼ Post-Communist Transition from Japan: How Beneficiaries Became Partners (O. Kushnir and O. Pankieiev, eds., *Meandering in Transition: Thirty Years of Reforms and Identity in Post-Communist Europe*, 315–329, Lanham: Lexington Books, 2021)　▼中東欧（森井裕一編『ヨーロッパの政治経済入門・新版』139–160, 有斐閣 , 2022）　¶ 5 学会報告・学術講演　▼ジェンダーと経済：中東欧諸国における家族政策の変容から , ロシア・東欧学会第 50 回大会 , オンライン (2021.10.17)

田畑伸一郎　¶ 1 学術論文　▼ The Contribution of Natural Resource Producing Sectors to the Economic Development of the Sakha Republic, *Sustainability* 13(18-10142): 1–16 (2021) https://doi.org/10.3390/su131810142　▼ロシアの経済・財政状況：2021 年の回復と迫る暗雲『ロシア NIS 調査月報』67(5):2–25 (2021)　¶ 2 その他業績（論文形式）（1）総説・解説・評論等　▼（原田大輔と共著）「人類の将来」の鍵を握っている永久凍土地域の経済活動『日経ビジネス電子版』(2022.2.8)　¶ 5 学会報告・学術講演　▼ The Contribution of Natural Resource Producing Sectors to the Economic Development of Regions in the Russian Arctic: Case of Sakha Republic, 10th International Congress of Arctic Social Sciences (ICASS X), online (2021.6.19)　▼ Observations on Russia's International Reserves, 10th ICCEES World Congress, online (2021.8.6)

兎内勇津流　¶ 1 学術論文　▼第一次ロシア革命とロシア正教会試論：なぜ宗務院体制打破と総主教制復興が提起されたか（貝澤哉、杉浦秀一、下里俊行編『< 超越性 > と < 生 > との接続：近現代ロシア思想史の批判的構築に向けて』201–232, 水声社 , 2022）　¶ 2 その他業績（論文形式）（4）翻訳　▼（醍醐龍馬と翻訳・解説）V. ラトゥイシェフ、G. ドゥダレツ「1869 年から 1870 年までのサハリンとアムール地方における侍従武官長イヴァン・スコルコフの委員会」『小樽商科大学人文研究』143: 17–49 (2022)　（5）その他　▼パネル「シベリア出兵と国際環境」『ロシア史研究』106: 97–103 (2021)　▼（及川琢英と）立花小一郎回顧余録（四）大正 9 年 8 － 9 月（翻刻）『近現代東北アジア地域史研究会 Newsletter』33: 89–114 (2021)　¶ 5 学会報告・学術講演　▼ 1930 年代ソ連極東部の国境管理体制と強制移住 ,「日ソ戦争および戦後の引揚・抑留に関する総合的研究」研究会 , オンライン (2021.6.27)　▼沿海州ゼムストヴォ参事会臨時政府（1920 年）試論 , ロシア史研究会 2021 年度大会パネル A「シベリア出兵 : その内外への波及 , オンライン (2021.10.24)　▼シベリア出兵の転換点としての 1920 年 , 第 31 回近現代東北アジア地域史研究会大会シンポジウム「ニコラエフスク事件（1920 年）と北サハリン占領（1920–1925 年）」, 立命館大学茨木キャンパス (2021.12.4)　▼イヴァン・クヴァチ（1908 ～ 1978）の写真に見る南サハリン、1946 年 10 月 , サハリン樺太史研究会第 59 回例会 , オンライン (2022.3.5)

中地美枝　¶ 1 学術論文　▼「女性に自ら決める権利が与えられるべきだ」：ソ連における戦後の人口増加政策と 1955 年の人工妊娠中絶の再合法化『ロシア・東欧研究』50: 1–20 (2021)　¶ 5 学会報告・学術講演　▼ソ連における統計と政治の関係：国家中央統計局長スタロフスキー（1905–1975）の役割から考える , スラブ・ユーラシア研究センター客員研究員セミナー (2021.12.14)　▼「女性に自ら決める権利が与えられるべきだ」：ソ連における戦後の人口増加政策と 1955 年の人工妊娠中絶の再合法化、ロシア東欧学会研究大会共通論題 , オンライン (2021.10.16)　▼ Замещение мёртвых. Политика воспроизводства населения в послевоенном Советском Союзе, Семинар «Россия и СССР в XX веке: новые темы и подходы», Германский исторический институт Москвы, online (2021.9.21)

長縄宣博　¶ 1 学術論文　▼ «Божьи гости» и антиимпериализм: Совестский хадж 1920-х гг. (Т. В. Котюкова, ed., *Ислам в России и Евразии (памяти Дмитрия Юрьевича Арапова)*,

561–582, СПб.: Алетейя, 2021)　¶ 2 その他業績（論文形式）（5）その他　▼中央アジアの近代：ロシア帝国とソ連は何をもたらしたのか（吉澤誠一郎監修『論点・東洋史：アジア・アフリカへの問い 158』278–279, ミネルヴァ書房 , 2022）　▼多民族帝国：伸縮するロシア人（沼野充義、沼野恭子、平松潤奈、乗松亨平編著『ロシア文化５５のキーワード』8–11, ミネルヴァ書房 , 2021）　▼ Insurgents Built In: How Wars Radicalized the Most Integrated Muslims in the Russian Empire, *All the Russias' Blog*, NYU Jordan Center (2021.4.26) https://jordanrussiacenter.org/news/insurgents-built-in-how-wars-radicalized-the-most-integrated-muslims-in-the-russian-empire/　▼ 2020 年度歴史学研究会大会全体会「「生きづらさ」の歴史を問う」への報告批判『歴史学研究』1009: 29–30 (2021)　▼プリンストン高等研究所の（リモート）研究員となって『スラブ・ユーラシア研究センターニュース』163: 17–22 (2021)　¶ 5 学会報告・学術講演　▼権力との信頼の構築と破綻：帝政末期のロシア・ムスリム社会の場合 , イスラーム信頼学ワークショップ , オンライン , (2021.7.20)　▼ Roundtable "The Imperial Acculturation Policy and Colonialism in the Russian Empire" (in Russian), 10th World Congress of the International Council for Central and East European Studies, online (2021.8.4)　▼ Familiar Strangers in the Party: The Rise and Fall of Tatars in Soviet Turkestan and Bukhara, 1920-1921, ICCEES 10th World Congress, online (2021.8.5)　▼ An Anarchist Turn? A Note for a Transnational History of Revolutionary Russia, ロシア史研究会大会共通論題 Russia and the Middle East, オンライン , (2021.10.24)　▼静かなラディカリズム：20 世紀初頭ロシアのムスリム社会の場合 , 史学会公開シンポジウム「世界主義の諸様相：コスモポリタニズム・アジア主義・国際主義」, オンライン , (2021.11.13)　▼ Muslim Soldiers in the Tsar's Army, Roundtable "The Imperial, Soviet, and Post-Soviet Soldier: A Roundtable in Honor of Mark von Hagen II," 53rd ASEEES Annual Convention, online (2021.12.1)　▼ Russia and Saudi Arabia, Roundtable "Russia's Unlikely Alliances: Awkward Twists and Momentous Turns in Eurasia, 1800 to the Present," 53rd ASEEES Annual Convention, online (2021.12.3)　▼ロシア・ムスリム研究と長い２０世紀：研究課題の考察 , AA 研フォーラム , オンライン (2022.2.1)　▼長い 20 世紀の終焉とウクライナ戦争 , イスラーム信頼学シンポジウム「ウクライナ戦争の背景とその波紋：我々は今どこにいるのか , オンライン (2022.3.25)

野町素己　¶ 1 学術論文　▼ (with Johan van der Auwera and Olga Krasnoukhova) Connective Negation and Negative Concord in Balto-Slavic (P. Arkadiev, J. Pakerys, I. Šeškauskienė & V. Žeimantienė, eds, *Studies in Baltic and Other Languages: A Festschrift for Axel Holvoet on the Occasion of His 65th Birthday*, 45–66, Vilnius: Vilnius University Press, 2021)　▼ The Evolution of Samuil B. Bernštejn's Views on Two "Questions of Slavistics," *Balkanistica* 35: 111–174 (2022)　▼ Aleksander Majkowski as a Grammarian, Prilozi, XLIV/1: 177–187 (2021)　¶ 5 学会報告・学術講演　▼ От пересказа к рассказу (через умолчание): Зигзаги взглядов С. Б. Бернштейна на «македонский вопрос», Балканские чтения 16. Стратегии межбалканской коммуникации: Перевод. Пересказ. Умолчание, Institute of Slavic Studies of the Russian Academy of Sciences, online (2021.4.20)　▼ All You Need is Slav: Avram Mrazović's Idiolect and the Polyvalency of Church Slavonic, Современные методы изучения сербского языка в синхронии и диахронии, Lomonosov Moscow State University, online (2021.5.17)　▼ On a Particular Usage of the Locative and Accusative Cases in Burgenland Croatian, Current Trends in Slavic linguistics, Institute of Slavic Studies of the Russian Academy of Sciences, online (2021.6.17)　▼ Changing (Linguistic) Identity among the Kashubs in Canada, ICCEES 10th World Congress, online (2021.8.4)　▼ (with Johan van der Auwera) Connective Negation and Negative Concord in Balto-Slavic, The Societas Linguistica Europaea 54th Annual Meeting, online (2021.9.3)　▼ (with Johan van der Auwera) Connective Negation and Negative Concord in Balto-Slavic, The Slavic Linguistics Society 17th Annual Meeting, online (2021.9.4)　▼ Interactions between Blaže Koneski and Samuil B. Bernštejn: From Unpublished Archival Materials, XLVIII

megjunarodna naučna konferencija na LIV letna škola na Megjunarodniot seminar za makedonski jazik, literatura i kultura, online (2021.9.4)　▼ The Evolution of Samuil B. Bernštejn's View on the Kashubian Question, Международная научная конференция. Межкультурное и межъязыковое взаимодействие в пространстве Славии (к 110-летию со дня рождения С.Б. Бернштейна), Institute of Slavic Studies of the Russian Academy of Sciences, online (2021.10.12) ▼ A.M. Seliščev as a Synthesist: A Story about His Unrealized Slavjanskoe jazykoznanie II. Južnoslavjanskie jazyki, Научное наследие А. М. Селищева и исследование периферийных славянских ареалов, Institute of Slavic Studies of the Russian Academy of Sciences, online (2021.12.8)　▼ Avram Mrazović's idiolect revisited, 60. skup slavista Srbije, University of Belgrade, online (2022.1.13)　▼ Взгляд Авраама Мразовича на язык обучения и вопрос литературного языка у сербов в конце 18-го и начале 19-го веков, XII Римские Кирилло-Мефодиевские чтения, Institute of Slavic Studies of the Russian Academy of Sciences, online (2022.2.3)

本田晃子　¶ 1 学術論文　▼カタストロフィの空間：ポスト・ソ連映画の地下鉄表象『スラヴ研究』68:123–165 (2021)　▼ Politics of the Image of a Socialist Edifice: The Palace of the Soviets in Soviet Films (Валерия Гречко, Хе Хён Нам, Сусуму Нонака, Су Кван Ким, eds., *Русская культура на перекрестках истории: Дальний восток, близкая Россия*, Вып. 4. 327–341, Белград: Логос, 2021)　¶ 2 その他業績（論文形式）（1）総説・解説・評論等　▼革命と住宅 第 4 回 第 2 章 コムナルカ：社会主義住宅のリアル（前）（中）（後）『ゲンロンβ 57』デジタル媒体 (2021)　▼革命と住宅 第 6 回 第 3 章 スターリン住宅：新しい階級の出現とエリートのための家『ゲンロンβ 57』デジタル媒体 (2021)　▼革命と住宅 第 4 章 フルシチョーフカ：ソ連型団地の登場（前篇）（後篇）『ゲンロンβ 57』デジタル媒体 (2022)　▼革命と住宅 第 5 章 ブレジネフカ：ソ連団地の成熟と、社会主義住宅最後の実験（前篇）『ゲンロンβ 57』デジタル媒体 (2022)　¶ 5 学会報告・学術講演　▼ Image Politics of Socialist Edifice: Analysis of the Palace of the Soviets Appearing in Soviet Films, ICCEES 10th World Congress, online (2021.8.4) ▼ソ連映画に見る集合住フルシチョーフカ、ブレジネフカ , シンポジウム「日韓ソ映画における 団地イメージの変遷」, オンライン (2022.2.5)

宮崎千穂　¶ 1 学術論文　▼（E・エルムロドフと）ウズベキスタンにおける新型コロナウイルス感染症対策『日本渡航医学会誌』16(1):1–8 (2022)　¶ 2 その他業績（論文形式）（1）総説・解説・評論等　▼感染症と個人・国家・地域：COVID-19 の世界的流行の中で飯島報告・山岸報告を聞いて『歴史評論』854: 80–85(2021)　¶ 5 学会報告・学術講演　▼ The Russian Naval Medicine and Modernization of the Mineral Springs in Unzen, ICCEES 10th World Congress, online (2021.8.5)　▼医学地理学が繋ぐ地域と世界 , 地域研究コンソーシアム 2021 年度年次集会・一般公開シンポジウム「地域研究とグローバル・アジェンダ :『濃い研究』のもたらす視座 , オンライン (2021.10.30)

吉田悦章　¶ 2 その他業績（論文形式）（5）その他　▼今こそ深めよう、ラマダンへの理解『EMB Business Weekly 中東・アフリカ』250:2–3 (2021)　▼イラン・サウジ関係再訪：接触報道を踏まえて『EMB Business Weekly 中東・アフリカ』256:2–3 (2021)　▼エチオピアでイスラム銀行が業務開始＝その背景と含意『EMB Business Weekly 中東・アフリカ』261:2–3 (2021)　▼ヨルダンにおける外交と財政の関係性『EMB Business Weekly 中東・アフリカ』266:2–3 (2021)　▼イスラム圏で期待高まるクラウドファンディング『EMB Business Weekly 中東・アフリカ』271:2–3 (2021)　▼利下げショック後のトルコ、経済の不安定性に注意『EMB Business Weekly 中東・アフリカ』276:2–3 (2021)　▼最近のペルシャ湾両岸対立の再構成『EMB Business Weekly 中東・アフリカ』291:2–3 (2022)　▼ウクライナ危機の中東情勢への影響『EMB Business Weekly 中東・アフリカ』296:2–3 (2022)　¶ 5 学会報告・学術講演　▼コロナ期のウズベキスタンにおける財政政策の特徴

と持続性：前政権時との比較やイスラームとの接点を交えて , スラブ・ユーラシア研究センター客員研究員セミナー (2022.1.14)

みせらねあ

望月恒子先生のご逝去を悼む

4月22日にロシア文学者で本学名誉教授の望月恒子先生が亡くなられました（センターに勤められた夫の望月哲男先生と区別するために、生前も恒子先生、恒子さんと呼ぶことが多かったので、以下でも恒子先生と書かせていただきます）。恒子先生は、1995年に本学文学部・大学院文学研究科の教員となられ、本学のロシア語やロシア文学の教育・研究に多大な貢献をされました。

ご専門のロシア文学では、十月革命後の数年間にロシアを離れた亡命者たちによる第一次亡命ロシア文学の研究者として知られていました。中でもブーニンの研究と紹介に力を注がれ、その成果の一端は群像社から刊行された5巻の『ブーニン作品集』に結実しています。2009 ～ 2012年度にかけて主宰された研究プロジェクト「辺境と異境―非中心におけるロシア文化の比較研究」の名前によく表れているように、恒子先生のご研究は小さな声によく気が付き、耳を傾けるものでした。ブーニンやチェーホフ、亡命文学の「見落とされた世代」に属し、日本でほとんど紹介がなかったガズダーノフの研究はそのような面からも理解できるでしょう。また、中国のハルビンや上海に集まって文学活動を行った「在外ロシアの東方の枝」を取り上げ、プラハ、ベルリン、パリなどヨーロッパ地域が中心であった亡命ロシア文学研究の視野を、アジア地域の研究によって広げました。ウリツカヤを中心に現代ロシアの女性作家を考察した論考もあり、これらすべてが、先生のお人柄とあいまって、続く世代の研究者たちに深い影響を与え、その活動に受け継がれています。ご所属の日本ロシア文学会では、2013 ～ 2015年度に北海道支部長を務められたほか、2016年度には本学で開催された全国大会を大会実行委員長として成功に導くなど、北海道と全国をつなぐ役割を果たしてくださいました。

望月恒子先生
RJE3 国際運営委員会（2016 年 8 月）より

2008 ～ 2009年度には文学研究科長を務められましたが、本学で初めての女性部局長として話題になりました。センター教員は文学研究科（現在は文学院）のなかで大学院教育に携わっているので、研究科長としての恒子先生のお世話になることになりました。2014 ～ 2016年度にはセンターの協議員を務めていただき、研究活動だけでなく、センターの運営にも直接的に関わっていただきました。

同じ2014 ～ 2016年度に恒子先生は本学の副学長に任命され、人材育成、女性研究者支援、

図書館など本学の様々な活動に貢献されました。なかでもロシアの極東5大学との教育交流プログラムであるRJE3プログラムについては、本学の代表として率いることになりました。モスクワで開かれた日露学長会議において流暢なロシア語で報告を行い、ロシアの大学関係者からも一目置かれたことを思い出します。

この追悼文の筆者の1人である田畑は、1988～1989年にモスクワに滞在した際、同じアパートに住んでいた望月家と家族ぐるみの交流をしたことが忘れられません。ロシア人の先生について一緒にロシア語を勉強したり、夕食後にトランプに興じたりして、厳冬のモスクワを暖かい思いで過ごすことができました。研究科長や副学長を務めるようになっても、それまでと全く変わらない穏やかな話しぶりや心づかいでまわりの方と接しておられたことも思い出します。68歳という早すぎるご逝去でしたが、今は安らかに眠られることを祈るばかりです。［田畑・安達］

専任研究員消息

ウルフ・ディビット研究員は、4月14日～7月11日の間、資料収集のためアメリカ（ニューヨーク）に出張。

野町素己研究員は、4月1日～4月22日の間、資料収集、資料整理、研究打合せのため、アメリカ（ローレンス、ミズーラ）に出張。

長縄宣博研究員は、5月18日～5月27日の間、国際会議「EMPIRE, COLONIES AND KNOWLEDGE」に出席・研究報告、カザフ国立大学での講義、資料収集のため、カザフスタン（ヌル・スルタン、アルマトゥ）に出張。

目　　次

新センター長から ……1

研究の最前線 ……2

2022年度夏期国際シンポジウム（1）: 生存戦略研究キックオフシンポジウム≪アナーキスト的転回？長い２０世紀における帝国支配と抵抗≫開催／ 2022年度夏期国際シンポジウム（2）≪ロシアにおけるメロドラマとメロドラマ的想像力：新たなパースペクティヴ≫開催のお知らせ／宇山智彦教授がカザフスタン共和国ドストゥク勲章を受章／人間文化研究機構地域研究推進事業「北東アジア」の終了／境界地域研究ネットワークJAPAN（JIBSN）の年次セミナー開催／ 2022年度公開講座「溶解する帝国－ロシア帝国崩壊を境界地域から考える」開講される／国際ワークショップ「比較帝国史：ユーラシアとアメリカからの視点」開催される／第64回北大祭・施設公開「危機を知る、ウクライナを知る」開催される／書評会「中塚武『気候適応の日本史』を読む」報告記／ 2022年JCREESスラブ・ユーラシア研究サマースクール開催予告／共同研究員／専任研究員・助教・非常勤研究員セミナー／研究会活動

人事の動き ……24

研究員の異動／ 2022 年度の客員教授・准教授

学界短信 ……25

学会カレンダー

大学院だより ……26

図書室だより ……27

Archives UnboundおよびDigital National Security Archiveの導入について／堀江家史料の受贈／ソ連共産党・国家文書マイクロフィルムの購入完了

編集室だより ……29

Acta Slavica Iaponica ／『スラヴ研究』／『境界研究』

会議 ……31

センター協議員会

誰が 何を どこで ……31

みせらねあ ……38

望月恒子先生のご逝去を悼む／専任研究員消息

2022 年 7 月 25 日発行

編集	宇山智彦
編集協力	ベクトゥルスノフ・ミルラン
DTP 編集	ささやめぐみ
発行者	野町素己
発行所	北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 060-0809 札幌市北区北 9 条西 7 丁目 Tel.011-706-3156、706-2388 Fax.011-706-4952 インターネットホームページ： http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/